

『そんなところで何をしている』

背で声はしていた。

今まさに元の位置へとロツカー押さえこんだきり、アルトとネオンは振り返る。

『え、や、その……』

覚えた後ろめたさが、ネオンに言わせていた。

制して黙れ、とアルトが目で訴える。

だが出てしまえば言葉こそ、引き戻せないものの代表だった。

『や、やだー』

だからして苦し紛れと、詰まったその先をネオンは連ねてゆく。

『いつまでこんな格好させておく気よー。このヘンタイー。あたしの服はどこよー』

その白々しさも頂点の大根芝居は、凄まじい。おかげでアルトの頬も引きつる。押してネオンが、視線を投げていた。小刻みに振るアゴで、何か言いなさいよ、と見合うアドリブをアルトへ要求してみせる。だからして冗談、とアルトが目を剥こうがおかまいなしだ。あたしは服を探してるのよ、と七面相でネオンは訴え続けた。

ままに睨み合うことしばらく。

やがてアルトの鼻から、荒い息はひとつ、吐き出される。

『うるせー。今さら服がなんだってんだー。それで十分だろうが』

一瞥くれて、天を仰ぐ。

『こちららもう見飽きてるんだ、つつーのツ』

言い切った。

『み、見飽きつ……!』

ゆえにネオンの頬が引きつろうと、耳の先まで赤くなろうと知ったことではない。

続かずその口は、パクパク、空さえ食む。

『あつ、あなたねっ! みあ、見飽きたつて、それつ、デリカシーつてもものがないのつ!』

とはいえ否定できなかつた。何しろ滅菌ゲルに閉じ込められた数多くの自分ですでに、それを証明している。おかげで大根芝居も、もののみごとに吹き飛んでいた。

『そいつは必要ない。歩かせる』

見せつけられた白衣の二人が、ドア前できよとんとしている。

振り返ったアルトはすかさず、そんな二人が持ち込んだポッドヘアゴを振った。ならそうだったと我に返つたらしい。一人がネオンへ歩み寄ってくる。

『気をつけろ。丁重に扱わないと噛みつかれるぞ』

『そんなことするわけないでしょっ!』

などと早々に嘯みつくも、かまわずアルトはそんなネオンの腕を取っていた。白衣へ引き渡す間際だ。のぞき込んだその顔へ、わずかに首を振って示す。それだけで伝わる何かは、湯水のごとく悪態を吐きかけていたネオンをピタリ、止めていた。

「約束」を問え。

言葉は脳裏を過る。

だからといってうなずき返すことはばかられた。それきりだ。ネオンはアルトの前をただ横切る。

『表の磁気錠が外れていましたが、あれはあなたが取ったのですか?』

問う白衣が、預かったネオンの背を押し出していた。

『俺が来た時からショートしてたぜ。アルトが逃げ出そうとドアを乱暴に叩いたんじゃないのか?』

アルトは答えて返し、ならばここに本人がいる以上、それは追求すべく話題ではないと白衣は判断する。

『今回、マスター立ち会いの元に、矯正を行います』

話題を変えた。無論、マスターとはクレツシエのことだ。

『確かに、前歴アリってわけだ。まかせつきりにはできやしないな。トパルもいるんだろ?』

アルトはすかさず確かめた。

『それが何か?』

白衣は問い返し、もう一人が早くも空のポッドが乗ったストレッチャーを、ドアの向こうへ押し出していった。

『いや、なら俺も付き合うぜ。自閉が解けたからといって、それまで矯正に携わっていたのは俺だ。いなけりや何かと不便なことがあるかもしれないだろ』

当然のように名乗りを上げる。その強引さに白衣が眉をしかめていた。

『問題ないとは思われませんが』

もちろん問題があるうと居座る気ではないに、返事に何ら期待はしていない。そしてそれが、最初で最後のチャンスでもあった。

『いいさ。あんたに判断を求めちゃいないよ』

だからこそ握りつぶさぬよう、アルトはそつと受け流す。

ストレッチャーは耳障りな音を響かせると、通路をリンクルームへ向かっている様子だった。追いかけてアルトも部屋を出る。誰もいなくなった室内のドアはやがて、閉

じられていった。

『で、あやつらは助けに来たわしらを閉じ込めて、一体どうするつもりじゃ？』

だからしてロツカーで塞がれた防音室の中、呟いたのはサスだ。その隣ではトラが、シワの間から抜き出した通信機を握り締めている。

『スラーとは通信が繋がったが……なんと言う？』

問われたサスが、うーん、と唸った。

『こら、呼び出しておいて返事くらいしろ！ こっちはバカでかいデータと格闘中で、猫の手も借りたところなんだぞ。聞こえてるのか、テラタン！』

おかげで通信機の向こうから、どやさる。どうもあちらはあちらで、てこずっているらしい。

『ええい。二人に閉じ込められたとでも言っておけいっ！』

ヤケクソ混じりとサスが投げ返していた。その耳をドアへすりつける。

『うむ。防音室とか言っておったな。外の音がまるで聞こえんわい』

隣ではトラがけんか腰、サスに言われた通りを伝えていた。まどろっこしく聞きながら、サスはドアの隙間へ爪を立てる。

『トラ、済んだら手を貸せ』

『わしに言うな、わしに！ 行きがかりじよう、そうならざるを得んかったのだ！』
スラーへ怒鳴りつけたのを最後にトラが、通信を切り上げドアに手をかけた。

『待たせた！』

その力はサスにとって百人力か万人力か。やがてゆつくりと、ドアは引き開けられてゆく。

(ボス、あれ！)

ジエスチャーに近い動きが、処置室へ向かうテンとメジャーの視線をさらっていた。ホログラムの巨大な樹が立つ部屋向こうだ。四つ角を横切つて、やたら騒々しい音を立てて白衣が台を押し歩いている。テンの探す『ヒト』二人もまた、その後ろから姿を現していた。

(なんや、あの奥へいくんか)

腰の辺りでテンは控えめに指を折る。

(追いかけますか?)

メジャーがたたみ掛けた。

(いや、おることがわかればそれでいい。処置室における奴が先や)

つづるうちにも白衣と『ヒト』たちは、テンたちに気づくことなく四辻を右手へ折れていった。

見送りテンは視線を手元へ引き戻す。ホログラムの樹が立つ部屋は、もう目の前にあった。一体が残る処置室はその隣だと記憶している。

とその時だ。ホログラムの樹が立つ部屋で、ドアはスライドする。中から白衣は飛び出してきていた。通路を走り去るのかと思えば彼らはすぐ隣、テンたちが目指す処置室へなだれ込んでゆく。二人、三人、さらには機材を押しながら現れた合計四人が、立て続けに中へと消えていった。

伝わる物々しさが、これからひと暴れするつもりでいたテンたちへ先を越されたような拍子抜けを食らわせる。互いに動話もなくテンたちは、ただガスマスク越しの顔を見合わせていた。

間にも、一人、二人、また白衣は潜り込んでゆく。入り口でぶつかりかけると、くるり、身をひるがえす慌ただしさだった。

何かがおかしい。

思えば残る距離を一気に詰めていた。様子に、ホログラムの樹が立つ部屋から姿

をあらわした白衣が気づき、短く声を上げる。かまうことなくテンは、スパークショットでそんな白衣を突き飛ばした。

処置室のドアは忙しい往来に、開け放たれたままだ。

たどり着いて中をのぞき込む。

だがベットは、囲う白衣と機材に遮られ見ることができない。ただ上部から照射されている滅菌ライトと、その真下、ベットへ頭を寄せた白衣たちの背中だけが、テンの目にとまっていた。

小刻みと揺れてかわされる会話のスピードが圧倒的だ。割り込めず、テンはしばし気圧される。やがて拉致があかぬと恐る恐る、部屋へ足を踏み入れていった。

前で、作業にいそしんでいた白衣がふい、と顔を上げる。目が、そこにいるはずのないテンたちを見つけて驚いたように見開かれていった。おかげで見えるようになってしたのは、それまで覆い隠されていたベットの一部だ。頭から被っていたはずの処置着を裂かれた部下の体は、そこにあつた。

『何をしている。遅延剤だ！』

すかさず飛ぶ怒号が、テンを見つけ押し固まっている一人へ浴びせられる。

『ぼうっとしている場合か！』

動かないなら、さらなる怒鳴り声は上がっていた。が、怒鳴りつけて顔を上げた白衣もまた、テンたちを視界にとらえる。忙しく動いていた手はそのとき止まり、唾然と口は開かれていった。否や、我を取り戻す。

『な、貴様らは別室に案内されたハズではなかったのか！　ここは、関係者以外立ち入り禁止だ！』

言ったところで、テンたちに造語は聞き取れない。

放ってテンはただ、アゴ先からファスナーを引き下ろしていた。光景をしかとその目で確かめんと、かぶっていたガスマスクを払いのける。

とたん触れた空気が目に染みっていた。それまで感じることのなかった腐敗臭もまた、強く鼻を突く。思わず眉間は詰まっていた。その背後でガタリ、音はする。

(こ、これは……)

メジャーだ。テン以上に動揺すると、その手から握っていたスパークシヨットを落としかけていた。慌てて掴みなおせば傍らで、もう一体も、ぎゃふんと跳ね飛んでみせる。

それはベッドの上だった。だが横たわっているはずの部下はもう、そこにはおらず、裂かれた処置着の中にスライムがごとく溶けて輪郭を失った肉塊は転がっている。そ

の塊は不規則な呼吸を繰り返すと、手足の名残と思しき四方出張った「何か」を振り回し、声もなくもがき続けていた。

これが大役をかって出た仲間の成れの果てか。テンの中で声は回る。だがあまりの変貌ぶりに信じきれず、瞬きさえもがきこちなくなっていた。

『今すぐ出てゆけ！』

向けて白衣が怒鳴りつける。外を指さし振り上げられた袖口には、いつしか透き通るような緑のシミが広がっていた。

『だめです。代謝、止まりませんッ！』

別の声が飛び、翻弄するように開け放たれたままのドアの向こうからさらにもう一人、白衣は飛び込んできた。動かぬテンとメジャーを障害物とかき分けて、ベッドへ駆け寄る。その手が握りしめているのは、半透明の袋だ。たどり着くなり白衣はその袋を裂いた。

『こいつらは、ほうっておけ。シールが先だ！ このままでは汚染が広がる』

慣れた手つきで袋の中から、二メートル四方はありそうなシートを引き出した。

『くそッ。矯正に手を取られたからだ！』

邪魔だ、といわんばかり機材に吊られていた滅菌ライトが払いのけられる。白衣は

ベッドを回り込み、肉塊全体を覆うように、取り出したシートをかぶせた。それを合図に他の白衣たちもまた、シートの縁をそれぞれ掴むと、力任せに引つ張る。

とたんシートは白く曇った。その内側から冷気のようなものを吐き出す。ままに、ベッドを覆つて、暴れる肉塊を押さえつけていった。

無論、密着してゆくシートに呼吸を確保するような隙間など、ありそうもない。つまり、まるところ白衣たちはこのケースを見限つたのだ。とテンは察する。とたん怒りは爆発していた。

(なに、さらしとんじやあつ！ キサマらあつ！)
振り上げた腕もろとも、白衣たちへ踊りかかつてゆく。

『それはどういうことですか？』

イルサリ、リンクルーム内でクレツシエは問い返す。

『申し訳ありません。くわえて極Ｙが暴れているため、制圧要員を要請中とのことです』

リンクルーム内での無線通話は、イルサリとのセッションを妨げるため許されてい

ない。しこうして通信は壁際に取り付けられた有線端末で行われていた。取りあげた端末を握りしめ、トパルはクレツシエへ聞かされたとおりを繰り返す。

『……塩基付加が失敗』

クレツシエが、くども吐き捨てた。

『マツチングミスによる拒否反応へは、マニュアル通りの処置を施しましたが、状況の改善にはつながらなかった模様です。アルトの矯正に人員をさいたことで、経過分析が追いつかなかったことが』

トパルは話すが、もうクレツシエは聞いていなかった。

『失敗……！』

眩きに遮られ、口を閉ざす。またも最後まで聞かれることなかった報告に、奥歯を噛んだ。自然、その目はクレツシエを睨む。気づくことなくそこで痛々しげに頭を振るクレツシエは、ただこう言つてのけていた。

『結構。いずれにせよ、セフポドにスタンエアを返したような輩です。こちらの要求どおり事が運ぶとは期待していませんでした』

やがて『エブランチル』独特の吊りあがった目は、トパルをとらえなおす。

『制圧後は特定流奪船乗船員として逮捕。即刻、当局へ引き渡しなさい。思惑通り運

ばねば用済みです。ただし、動話解体と言う目的があります。極Yへの音声言語付加については、アルトの矯正結果待ちと、優先順位を変更するかたちで続行します』

そしてふと思いついたように、笑みを浮かべてみせた。

『ならば、長らく放置していたアレがどこまで使えるのか。さしあたっての問題はそこになるでしょうね』

その笑みに引き込まれかけてトパールは、我を取り戻す。まだ繋がっている有線を、急ぎ耳へ押し付けなおした。この場を借りて、シャツフルの行方に進展があつたのか、確かめたく思う。

だがそれはもう澄んだ事と、いさめるクレツシエの声を聞いたような錯覚を覚えていた。確かに発してしまえば、いさめられることは容易に想像できる。あえてさらにその機嫌をそこねるなど、トパールには出来なかつた。

『何をしているのですか？』

迷ううちにも、クレツシエに問いただされる。

『いえ』

答えるトパールの中に、悔しい思いだけが澱と残った。

クレツシエさえいなければ。

胸の内です。毒づく。

その毒でトパールは、己の中に「ある」思いを初めて知らされていた。

ならばもう、無視することなどできはしない。いや、押しつぶそうとすればするほど意識されるその毒に、侵されてゆく自身を止められないでいた。だからこそばれぬようにだ。いやそれこそ見ぬフリで、感じぬフリで、トパールはクレツシエへただ返してやる。

『おっしゃるとおりかと、思われます』

それこそが割り振られた役割だった。これまで何一つ考えることなく繰り返してきた、例外の存在しない応答だった。

遠い昔から用意されていたこのシナリオは、ここにこうしてある限り、これから先も続くだろうとトパールは強く確信する。だからこそふと、立ち止まってもいた。彼ならば、この場であろうとやはりシャツフルの行方を確認しただろうか、と思ひ巡らせる。そうして得た答えに、ひとりごちていた。ここからアルトを連れ去った瞬間からだ。彼は用意されていたシナリオを捨て、その外へ飛び出してしまったのだろうと考える。

造られた流れの、その外側へと。

自だけが持つ確信の元へと。

奴らはボーダーだと思え。

我々は外へ出る。

シャツフルの言葉がトパルの中をまた巡る。

それはこうも忘れられぬものとして、うすらぼんやりながらもすでに染みつきトパルの中に息づいていた。息づくことで、造られたのではなく生まれてきたと言つてよこした彼の曖昧さのなんたるかを、理解できなかった向かうべき外がどこにあるのかを、初めて像と結び始める。

用意されたシナリオを捨てた彼が主張する曖昧さとは、自らが何者であるのか、与えられて当然と思ひ込んでいた役割を永遠に捨て去ることで得た浮遊感、そのものだ。その予測できぬ動きが絡んで広がる混沌とした世界こそ、向かうべき外ではないのか、と感じ取る。ならそこにあるのは、予測不能であればこそその絶対的な隔絶と、その混沌が生み出す解消されることない齟齬で間違いなかった。だからして横たわる底なしの孤独もまた、垣間見る。

だというのに、そこへ向かわねばならない。

メリットは。

トバルは考えていた。

シヤツフルは『カウンスラー』で見返りはある、と言っている。

しかしそれが何なのかが分からない。

トバルは眉をひそめた。

違いなどない。

証明すべく外へ向かうと勇んでいたはずだというのに、怯みさえする。

瞬間、リンクルームのドアは開いていた。

真正面、クレツシエが泳ぐかのように振り返る。

メガソケットをモニターしていた二人もまたドアへ体を向けていた。

リンク中の二人は微動だにせず、トバルも目が覚めたように視線を投げる。

押し出されたポッドはそこで、リンクルームへ乗り上げていた。後に続き、矯正の

準備を担当していた白衣が二人、さらにアルトが、セフポッドが、室内へ姿を表す。

飽和状態となったリンクルームの温度が、錯覚でもなんでもなく上昇した。煽られ

て、それぞれの視線は不安と緊張を織り交ぜ狭い室内、交錯する。

ポッドが手狭となった室内の端へ、据え置かれていた。

押ししていた一人が、モニター中の二人へ現状の確認に向かう。

セフポドはちらりトパールへ視線を投げてすぐ、クレツシエと対峙していた。見つめ返すクレツシエが浮かべた笑みは、全てを手中に収めたかのごとく満足そのものと見えてならない。

『思いのほか早く仕事にとりかかってもらえたようで感謝していますよ、セフ』
耳につく猫なで声が、持ちうる力を誇示していた。

『やはりあなたはF7のセフポドに变りない様子で、何よりです。ただ、衛生面にはもう少し心を砕いていただきたいものですね』

その猫なで声で、着用していない白衣を諭す。

ここへ入る前にすれ違った時とは似ても似つかぬほど強張った表情のセフポドには、答える様子がなかった。だからこそ代わってトパールは胸の内、こう答える。

それはとんだ見当違いなんだ、と。

『この、クソ忙しい時に処置室へ隊員をよこせだど？』

窺られた分隊長の通信機は、新しいものへ挿げ替えられている。しかしながら壊しかねない勢いで分隊長は、怒鳴りつけていた。

さすがに船内を熟知しているだけはある。ラボ専用の電気室区画、その網の目のように張り巡らされた通路をシャツフルは、迷うことなく逃げ続けていた。現れたウィルスカーテンに、右へ左へ躊躇なく通路を折れるその足取りは怪我など負っていないかのようにさえ見える。

『中で極Ｙが暴れているとのこと。制圧の要請がありました』

『当然だろう！ 塩基付加だか何だかは知らんが、中へ入れたりするからだ！』

最低限、構造上バッテリーの上がりやすいスパークシヨットのプラグは抜かせたが、招待客であることをアピールすべく没収しなかつたつまらぬ駆け引きに、罵る以外、返す言葉が出てこない。

『これ以上、こちらの数を割けば穴があくぞ』

分隊長は跳ね返す。

と、そこで迷路のようだった電気室区画を抜け出す。見通しの利く間つすぐな通路は伸び、気配ばかりだったシャツフルの背は通路奥、とたん照明のもとにさらされた。『別動班、対象は電気室区画を出た。まもなくそちらと合流するぞ！』

分隊長はプロダクトルームへの返答を保留し、先回りさせていた三体へ急ぎ伝える。そう、警戒線として照射率を上げたウィルスカーテンで仕切られたこの区画の出口は

今、ひとつに制限されていた。IDの入力でしか開閉しないそれは、民間へ解放中の霊安所エリアへ続く鉄扉だ。

『了解。現在、第一霊安所内を移動中。詰め所を抜け、急行する』

聞き終えると同時だ。指示を待っているだろう保安所へ、分隊長は声を張った。

『いいか、待機所の三名をアズウェル装備で急行させろ。指揮は班長に任せる』

了解の声も中ほどで、通信を切る。ダイラタンシーショットガンを握りなおした。

これ以上の失態は今後にかかわりかねない。同情と言う名の感情の完全封鎖に、しばしつとめる。何しろつけ入る相手こそ、同胞などと欠片も感じていない冷徹な輩だ。

容赦手加減そこ命取りだと分隊長は、目の前の事にのみ神経を集中させてゆく。頂点と高まったところで、追いかけて続けたシャツフルの背は予想通りの軌道を描き、鉄扉を指して右へと折れた。

『対象、通路を右折。ドア正面へ出た』

別動班へ短く告げる。周囲四体へも追い立てるピッチを上げるよう手を振り上げると、その時だ。

分隊長の中に解せぬ思いはわき起こっていた。それは至極単純なものだ。なぜシャツフルは奪ったハズのミラー効果を使用していないのか、というものである。これで

はまるで追いかけてくれと言わんばかりだった。だがそれだけでもう十分だろう。次の瞬間にも声はもれだす。

『しまった!』

思い当たる理由など、ひとつだけだ。効果一式を何者かに譲った。そしてその第三者の存在を仮定すれば、あえて警報を鳴らしたことも、この派手で無駄な逃走劇も、全てが妙にしつくり飲み込めてくるのだから、疑いようがない。

陽動作戦。

こうして攪乱されている間にも、見知らぬ何者かはミラー効果を稼動させ、隠密のうちに行動しているのか。

『くそつ、極Yか?』

現に、処置室で騒ぎは起きていた。

隊長は保安所を呼び出す。

『全隊員へ警告! 何者かがミラー効果を使用してラボ内に入った可能性がある。相互チェックを開始。不審な効果の残像があれば即刻拘束しろ! また不審船着艦の恐れあり。艦橋に入艦記録のチェックを要請しろ!』

当のシャツフルは、霊安所へ続く鉄扉へ階級章をかざしている頃だろう。まだドア

向こうの別班からは、何の連絡も入ってこない。

そしてライオンは目を瞬かせる。

傍らでは、トラからの連絡を叩き切ったスラーが、だいぶさまになってきたレプリカの軍服も凜々しく入艦記録との格闘を続けていた。だからしてその光景にスラーはまだ、気づいていない。

『バレたか……!』

ゆえにライオンはひとり、吐く。

無理もない。詰め所から見渡せるガランとした霊安所へ、今まさにそぐわぬ物々しきで連邦軍は駆け込んできていた。

『まだ、バレちやいねー』

スラーは返し、

『違う! 向こうから軍だ!』

ライオンは指を突きつけた。なら軍と聞いたスラーの動きはピタリ、止まる。『エブランチル』独特の吊りあがった目を持ち上げていった。

『な、なんだと。どうなつてやがる！』

やおら背を向けたライオンの顔はそこで、次から次へと様子を変えていった。

『……モディー！ おい、モディーツ！ 一体そつちはどうなつてやがる』

など等と呼びつける声が響くのは、スラーの霊枢船が停泊す格納庫内だ。メンテナンスも終了した船内、不安定な偽造IDの維持に精を出すデミの隣でモディーは、跳ね上がっていた。

『し、しやちよー。モディーは驚かされたでやんすよー』

『うるせー。偽造IDがバレちまったのかつて聞いてんだ！ こつちに軍が駆け込んで……』

とたんモディーはぐるりと、デミへ片目を回転させる。

『大丈夫。なんとか持ちこたえてる』

見向きすることなくデミが鼻溜を揺らして答えた。

『社長、デミさんの話によれば、まだバレてないそうでやんすが……』

だがスラーの応答はない。

『し、社長？ 社長、しやちよー……？』

『違うよ、それ』

ぴしやり、デミは遮る。

『おじいちゃんたちかも知れない』

『サスさんと、トラさんが？』

モデイーは振り返る。ホロスクリーンを見つめるデミは、そこで似合わぬ険しい顔をしていた。

『ふたりが見つかったかも知れない、でやんすか？』

『違うかもしれないケド』

と、やおらモデイーは立ち上がる。

『モデイーが行って、確かめてくるでやんす』

その目は珍しくも一点を見つめていた。腰掛けていた操縦席をかわし、ひらり、身をひるがえす。刹那、動きを止めたのはデミの手だった。硬直した背中が息をのんでピン、と反りかえる。

『待って！』

呼び止める声は外へ漏れるほどにも大きかった。あまりの剣幕に降りていた階段を

踏み外しかけてモデイーは、手すりへしがみつく。

『も、モデイーは待ったでやんす。な、なんでやんすか？ デミさん』

しかしながら、ホロスクリーンを眺め続けるデミが振り返ることはなかった。ただ独り言のようにこう鼻溜を振る。

『ダメだよ……。入艦記録の再チェックが始まっちゃった。ぼくひとりじゃ、今度こそバレちゃうかも！』

荒事に慣れていない白衣の反応は、鈍かった。飛びかるテンの目に、風にあおられなびく布切れと映る。ならテンは邪魔な彼らの襟首を、四本の腕でそれぞれ驚掴みにした。背負ったスパークショットさえ振り回し、ベッド際からむしり取る。次々、辺りへ投げ捨てていった。

一人、二人と白衣が壁へ張り付き、床へ転がり、鈍い音を立てる。傍らに据えられていた機材へも倒れかかったなら、足元をロツクされた機材のフロートが白衣もろとも、横倒しとなった。派手な音は辺りへ響き渡り、照射されていた滅菌ライトが天井を滅菌する。かと思うと床で跳ね、砕けて破片を無数と飛び散らせた。とたんベッド

に横たわる塊へつながれたコードが、たるみを失いピンと張る。貼り付けられたシートの間から、飛ぶように引き抜かれていった。

(おい、大丈夫か！)

かいくぐり、テンはベッドの中をのぞきこむ。貼り付けられたシートを引き剥がそうと、上の手を伸ばした。

『勝手なことをするな！』

まだ残る白衣がそれを、押し止める。

瞬間、そんな白衣の頭がぶれた。

後頭部にメジャーのヒジはみごと、めりこんでいる。

気づけばもう一体が機材の傍らで、立ち上がりかけていた白衣をあらぬ方向へと、殴り飛ばしていた。唯一、壁に叩きつけられた白衣だけが壁伝い、処置室の外へ逃げ出してゆく。

邪魔者のいなくなつたそこでテンは、満を持してシートを剥ぎ取つた。そのとき妙な音は聞こえ、シートが糸を引く。さらに腐敗臭は強まり、テンはその目をきつく細めた。

ベッドとシートの間にはもう、固形物ですらないものがへばりついている。崩壊も

最終段階を迎えた赤黒い流動体のみが、そこには取り残されていた。あれほどまでに振り回していた四肢の痕跡もなく、呼吸らしき動きも見いだせない。

(うわ！)

遅れて覗き込んだもう一体が、またもや腕を振り上げ、うろたえた。

睨み付けたままでテンはそつと、シートを戻してゆく。

手が離せない。

テンはシートを握り締めた。

(どんな格好でも、連れて帰るつもり……)

宙を泳いでいた別の腕が動話を絞り出す。

遮り、その手は握られていた。

メジャーがそこで、テンへ静かに首を振っている。

思わず息をのみ、テンはうなだれていた頭を持ち上げていった。

今は、感傷に浸れるような場面ではない。言い聞かせる。

証明してその背へ、けたたましい足音は覆いかぶさった。止まりかけていた時は動

き出し、振り返ったテンたちはドアへと視線を飛ばす。

先だって転がりだしていった白衣が知らせたのだ。開け放たれたままのドア周囲に、

隣から駆けつけてきた白衣の影はちらついた。交互に中の様子をうかがうと、あからさまに警戒していみせる。

それも素人を相手にして、怯む道理などあるはずもなかった。テンはじわりベッドから、ドアへと向きなおつてゆく。白衣を見据えて手探り、スパークショットを手元へ引き寄せた。

(残、五〇)

上二本の腕で淡白に綴るそれは、スパークショットの残り放電時間を知らせるタイミングだ。

応えてメジャーともう一体もまた、スパークショットを構えなおした。感触を確かめるようにグリップを握る。深く腰を落としてテンの脇を固めた。

(取引は、不成立や。今からヒトを取り戻しに向かうぞ)

押し殺すようなテンの動話にみなぎるのは、ピリリとした緊張感だ。

(了解)

(ウイツス)

感じ取り、動話というよりもより短いジェスチャーで、メジャーともう一体はうなずき返す。

視界の端で確認しつつ、テンは倒れる白衣を足先で転がし、倒れていたフロートを引き張り起こした。

滅菌ライトが骨折しながら、あさつての方向を向いて砕けた照射面をぶら下げている。一体何を測定していたと言うのか。倒れた際に引き抜かれたそれもまた、流動体をこびりつかせるとじやらり、音を立てた。

四本も腕があればこういう時こそ事欠かない。テンは余るもう一本の腕でフロートを作動させ、足元のロツクを解く。同時に別の手で指揮をとるかのごとく、メジャーともう一体へ合図を送った。

とたんテンの手元から、ドアへ向かつて機材は滑り出す。滑走する機材は奇声にも似た軋み音を立てると、あつという間にドアをすり抜けていった。及び腰で処置室内を覗き込んでいた白衣たちを蹴散らし、勢いもそのままに壁へぶち当たる。筐体たわませ、砕けて破片を飛び散らせた。

遅れまじと、テンが床を蹴りつける。処置室から飛び出し見回せば、へつぱり腰と壁に張り付いていた白衣と目は合った。手始めに、その脳天を振り下ろした電極で潰す。背後で、目の当たりにして逃げ出した白衣へメジャーが放電していた。もう一体は壁へ激突したフロートの傍ら、腰を抜かしてへたり込む白衣を掴み上げている。み

ぞおちへ、横面へ、残る拳を浴びせていた。免れた白衣たちはその間から、もつれる足のままに逃げ出してゆく。

(こら、またんかいっ！)

ぐったりした白衣を投げ捨て、一体が身を翻した。

(ほっとけ！)

テンは押し止め、腕を大きく振る。

(ヒトや！)

立て続け指を折った。その指で、処置室へ入る直前、この通路の奥へと消えた彼らを指し示す。目にした一体が、逃げ行く白衣を惜しみつつ足を止めていた。メジャーもまた、久方ぶりの放電に付着していたホコリを焦がす電極を片手に、うなずき返す。とそれは、走りゆく白衣から視線を引き戻そうとした時だ。一体の目に、通路をこちらへ走りくる武装集団は映る。瞬間、消えた。言うまでもない、ミラー効果だ。

(ボス！ 軍がきよった！)

振れば、踵を返しかけていたテンの動きは止まっていた。

メジャーが電極を正面へ向けなおす。探して、通路の隅から隅を見回した。しかし逃げ去る白衣の背中以外、何も見てとることはできない。とたん見えぬ力に弾き上げ

られ、メジャーのスパークショットが大きく逸れた。メジャー自身もそこから吹き飛ばされる。宙を舞った体は床で跳ね、止まらず通路をこれでもかかと滑った。

(メジャー！)

叫びとも取れる振りだ。テンはつづる。その足がメジャーへ切り返された。とたん、かすめて何かは飛来する。

ダイラタンシーベレットだ。

気づき屈んだ頭の上を、同様に弾は飛び去っていった。

かまわずテンは突進する。

横たわるメジャーの傍らへ滑り込んだ。かすかにもがくメジャーは、明らかに被弾している様子だ。テンは迷わず自分のスパークショットを肩へ担ぎ上げ、メジャーのスパークショットを拾い上げた。残る腕でその体を掴み、なおかつ残る腕で動話もまた放つ。

(樹の生えとる部屋や！)

室内はこの騒ぎで、すでもぬけのカラだ。逃げ込めと、もう一体を促した。

見て取った一体が、やおら強い雨脚から逃れるように身を屈め、目の前にあつたドアへ走る。いち早くスライドさせ、くぐり抜けて閉まりきらぬようそこへ体を挟み込

んだ。

(ボス！)

メジャーを引きずるテンを待ち受ける。

飛び来るダイラタンシーベレットが、そんなテンの目の前で、壁際でへしやげたフロートをさらに細かく打ち砕いた。察するに、弾の濃度は最高レベルらしい。テンは腹の底から、クソツタレと毒づく。毒づきながら、メジャーを引き連れ部屋へと転がり込んだ。

前でドアが、追いかけて飛びくる流動弾を遮り閉じてゆく。

(すみません、こんな時に)

かすかと振るメジャーの様子は弱々しい。だからこそテンの振りは、粗暴を極めた。(アホか。そんな話は後や！)

傍らでは機転を利かせた一体が、ドアの動力部をスパークショットで焼き払っている。放たれた閃光はまるで生き物であるかのように電源を伝い、部屋の隅々へ走り去っていった。乗じてフワリ、一瞬ながら周囲の照明が落ちかける。

(動けるか？)

投げ出しかけていたメジャーのスパークショットを担ぎ直し、テンは問いかけ。メ

ジャーは息苦しげにアゴ先のジッパーを下ろすと、ガスマスクを脱ぎ去り返す。

(なんとか)

そんなメジャーの脇へ、テンは腕をくぐらせた。気づいたもう一体が反対側へ回り、同様にメジャーを支える。ならちようど脇腹辺りだ。メジャーのラバースーツは裂けると、そこに流れ出す体液をヌラリ、光らせていた。早急の手当てが必要だと、テンは察する。だがそれもこれも、ここから脱出しなければ望むことができそうもなかった。

(やっかいやな、ミラー効果)

メジャーには無理があると分かりつつ歩調を早める。テンはともかく円卓の向こうへ急いだ。

懸命に足を運ぶメジャーの息は、ただそれだけで上がっている。

挟んで支えるもう一体が、やおらテンへと腕を振つてみせた。

(ボス、あれは水とホコリに弱いんですよ)

(それくらい、俺もしつとるわ。せやからここでどないせいいうねん)

駆けつけた軍は早くも、ドアの撤去に着手し始めている。隔壁代わりのドアとは違い、薄いそれは的確な彼らの対処に揺れ動くと、今にも開きそうな気配を漂わせてい

た。

(なんや、これだけあつたら、どうにかなりそうやないですかあ)

盗み見ながら、円卓の影へともぐりこむ。ゆつくり身を屈め、テンはメジャーを座らせた。温和な日ごろからは想像のつかぬほど顔をゆがめたメジャーは、傷口をかばうように体を捻ると、しばし楽な姿勢を探してうめく。

(わたしが、囧になります)

おもむろに動話を放った。

見て取ったテンが最後まで読み取ることはない。かぶせて手早く指を折り返す。

(何、言うてんねん。それは俺が許さん)

(彼らがわたしの確認に、必ず近寄ってくるでしょう。そこを……)

押し問答だ。

だからして傍らでもう一体は、しきりに周囲へ頭を振っていた。見たことも触ったこともないような装置を眺め回し、この部屋の一番禺、据えられた観音開きの扉へその目を凝らす。くぐれば奥にまだ、別の場所が開けている様子だった。感じ取ったからこそ体は、動きだす。動話もなくそこへと擦り寄っていった。

跳ね開けたなら、ラバースーツ越しであるにもかかわらず空気が変化したことを感

じ取る。言い得ぬ緊張は走り、過剰なほど周囲へ視線を走らせた。奥へまた足を進める。

薄暗く狭い通路は、天上に剥き出しのエアダクトを這わせていた。要所、要所、くどいほどのウイルスカーテンが敷かれてもいる。くぐり、中ほどにまで来たところで、やがて感じていた外気の変化が湿度であることに気づかされていた。

足を止め、確かめるべくガスマスクを脱ぎ去る。

五感がより鮮明となっていた。

おかげであまり発達していない極Yの耳へも、かすかと空気の流れる音は聞こえてくる。追って一体は、頭上のエアダクトへ目を向けた。辿り、再び足を進めれば、行く手を塞いで霜に覆われた三重ロックの厳重な扉を見つける。

エアダクトはその中へ吸い込まれていた。

一体は、そんなエアダクトを電極で突いてみる。

乾いた音と共に圧のかかったそこ、一瞬、霜は白く広がっていた。

(こいつ……!)

その目が見開かれる。

ためらう時間こそない。

突いた電極の先もそのままに、一体は引き金を絞った。

およそ十五セコンド。

焼き切られたダクトに穴が空く。とたんそこからスモークよろしく、白い冷却ガスは噴き出した。床を這い、ガスはあつという間に足元を埋め尽してゆく。

かき分け外へと向かいながら一体は、さらにもう三つ、ダクトへ穴を空けた。噴出すガスはもう濁流のごとくだ。床をうねり音を立てるように流れてゆく。その中を走り抜け、一体は解放してやるべく、観音扉を開け放つ。

(ボス！ 水、見つけたッス！)

つづるのと同様だった。こじ開けられようとしていたドアが室内へ倒れ込むのを、見る。

ひと時、不安定に瞬いていた明かりがそれを合図に、消え去った。それでも立ち続ける円卓の樹がオレンジ色の光を放ち、通路から漏れる明かりと共に、音もなくゆつくりと床へ広がる冷却ガスを照らしだす。

リンク状態をモニターしていた白衣が一人、ネオンへ向かい歩き出した。

興奮に潤んだ瞳でその姿をクレッシェは、追っている。

『現状の解析は、より緻密なものを求めます。覚醒状態のままでは解析を』

耳にしてトパルもまた、ネオンへ歩み寄っていった。腕を取れば、辿ってネオンがトパルを見上げる。もう片方の腕もまた白衣が掴んでみせたなら、そちらへも振り返った。そうしてアルトへ首をひねる。

「じゃ、ね……」

聞こえるのは吐き出された言葉よりも、堪えたその前と飲み込んだその後の方だ。十分なほど受け取ったなら、アルトが返事を返すまでに、くらかの間はあいていた。

「……おう」

受けてネオンがわずか、口元を持ち上げる。それは頼りにしている、と言っているのか、任せなさい、と言っているのか、アルトには読み取ることができない。ただネオンへ目を細めて返す。

急かしてトパルと白衣が、ネオンの腕を引いた。メガソーケットを前に背を向けさせると、押し込むように座らせる。

ネオンの顔にもう、あの笑みはない。その顔色はこころもち青白くさえ、アルトの目には映っていた。

ままに白衣が、ヒジ掛に乗せた腕を拘束具で固定してゆく。宙を睨んだぎり真一文字と唇を結んだ顔を覆い隠し、磁気検出コイルの張り巡らされたプレートをかぶせていった。

後戻るなら今しかない。ちやぶ台でもひっくり返すようにしてこの流れを断ち切れば、一か八かの賭けを免れることはできた。だがしかしその後が続かない。だからしてアルトはネオンから逸らした視線で、クレツシエへと向きなおる。そこでクレツシエは心待ちにしていた芝居の幕が、今まさに開かんとしているのを待ちわびていた。

『こだわる理由がどこに？』

だからこそ不躰と、アルトは言葉を投げつける。

だがクレツシエが、その表情を変えない。メガソーケットの装着状態を確かめるトバルと白衣の動きを食い入るように見つめながら、声だけを毅然と通してアルトへ返す。

『連邦の調査では、毎秒七二〇〇〇船が航路から消失。同時に毎秒四九〇〇〇の放置、遭難船が既知宇宙から発見されていることが明らかとなっています。その七十二パーセントが長距離航行船であり、積荷の被害総額は毎秒、八十五兆GKを下りません。積みまれていた荷を待つ末端の被害額となれば、把握できないというのが現状です』

そうして向けられていた顔は、アルトへと振り返っていた。とたんそれまでであった笑みへ、わずかながら影はさす。

『その原因の六十七パーセントは言うまでもなく、航行中に発症するイルサリ症候群です。ついで十四パーセントが船賊による強襲でした。こうしている間にも被害が出ていることは、言うまでもありません。知りながらあなたはわたしに手綱を緩めろ、と言うのですか？ その怠慢が、経済や我々自身へ与える多大なダメージを黙認することだと分かっている、見逃せと言うのですか？ まさか。守ることが政府の当然の役割。わたしの成すべき勤めです。それこそ一セコンドでも早く事態を收拾こそすれ、怠ることは許されません。なおさらそこにこだわり、などという個人的嗜好の介入は、考えられない』

言いたかったのはそのことらしい。

『質問の仕方が、悪かったようで』

アルトは軽く目を伏せる。聞き流して仕切りなおすべく、口調を引き締めた。

『だがそうせしめたのはこの造語であり、市場の拡大を目的に、既知宇宙の画一化を推し進めてきた政策のせいだ』

と、そこでクレツシエは即答を避ける。目が、ひときわアルトを強く見据えた。胸

の内をのぞき込むがごとく、瞳孔を大きく開く。だとしてこの会話に、悟られて困るような偽りなどありはしなかった。アルトはその詮索を真つ向から受けて立つ。

沈黙が過ぎればどこか期待はずれだったのだろう。クレツシエは目を伏せる。なに先回りすることもなく、力の抜けた様子で問われた通りを答えて返した。

『地域格差を互換性の問題と捉えなおすなら、これほどの機能不全はないのです。それとも手を伸ばし、もぐことの出来る果実をみすみす腐らせろと言うのであれば、その原始的な美的感覚こそ矯正すべき点でしょう』

再びネオンの収まるメガソーケットへ、視線を戻した。

『……野蠻、極まりない』

吐き捨てる。

『そいつこそ、個人的な嗜好だぜ』

アルトまた突き返していた。

プレートに頭を覆われたネオンは、大きすぎる白衣ばかりが目に残まって、一見するとどこに居るのがわからない。光景はまるでメガソーケットに白衣だけが掛けられているかのようで、やがてその傍らから装着状態の確認を終えたトパールと白衣は離れていった。

『嗜好？ まさか』

つまり開始まであとわずかだ。

クレッシェも知っているからこそ、作業を見守りつつ、その声を高くする。

『我々は国家を、政府を持ち、文化、文明の中に生活しているのです。その政府、文化、文明は個人の嗜好により定まるものではなく、全体の総意、理想として据え置かれたものにほかなりません。いえ、それが理想と練られてきました。ゆえに我々が推し進める市場の拡大もまた、その過程における総意、理想を形としたものです。成し得るため連邦は、ながらくの間、隅々にまで手入れを施し、緻密な構築を続けてきました。個々の嗜好が横暴する統制以前の無法地帯などは、違うのです。ですがそのやり方も限界を迎えつつあることは、認めなければならぬ現実でしょう。だからして新たな世界の枠組みは、今こうして必要とされているのです』

『理想、か。確かにそうかもしれない』

続くアルトの口調は早かった。

『だがそいつを追求するのは、俺たちの外だけに押し止めておくべきだと思うね。掲げて世界を一つにまとめ上げようとするのは、いっこうにかまいやしない。だが飛び越えて俺たちの内側にまで踏み込んでくるってのは、大きなお世話だ』

ネオンを離れた白衣が再び、メガソーケットをモニターすべく監視員たちの元へ向かっている。

トパルは、並ぶリンク中の白衣へ身を屈め、プレートに覆われえたその耳元へ何事かを囁きかけていた。

かつての矯正ならば、アルトにとって作業へ入るまでの時間には覚えがある。だが今回もまた同じだけの時間が残されているのかどうか、確証はなかった。ゆえに仕掛けるタイミングは、勘となる。

『それはつまり格納庫での話の続きを望んでいる、ということですか？』

クレツシエエが、監視していた白衣から振り返った。流れた瞳はアルトをとらえ、黙れと言わんばかり睨みつける。

『セフ、無駄なあがきはおやめなさい。証拠に、あなたはイルサリの自閉を解いた。たとえそれが、憂うべき最も原始的な嗜好である同胞と同郷、その野蛮な幻想に当てられたせいだとしても、あなたはそうすることで自らその領域へ今、文明のメスを入れたのです。主張する立場にない』

全機能でもってして解析を進めるのだろう。トパルに何事かを吹き込まれた白衣が二人、プレートを跳ね上げメガソーケットから抜け出す。その足を、矯正が終われば

必要となるだろう仮死の準備に、ポッドへと向けていた。

様子を目で追うわけにも行かない。アルトは背で気配だけを感じ取る。クレツシエの話へ耳を傾けた。

『あなたが何と主張したところで、これより我々はその原野へ踏み込み、より快適に住まうことのできる土地へ変えるため徹底的な手入れを施します。地域に根差す個体差、その染みつき離れぬ概念を、そこに始まる全ての壁を払拭し、既知宇宙全体を同一の故郷として個の中へ埋め込む試みを成功させるのです。成し得、障壁を取り除くことができたなら、ホームシックに始まる症候群もまた緩和し、あなた方が懸命だった個も助けることができるでしょう。ただ同時に』

クレツシエの言葉はそこで切れる。自らもそれを見ることは出来ないだろうと、壮大な計画の結末を見据えて、遠くへ視線を投げやった。

『同時に、我々が作り出した造語以外の言語と文化を、消滅させることにはなるでしょうが』

『いや、違うね』

アルトは遮る。

クレツシエの目が丸くなっていた。

『残るのは造語とあんたら二十三種のみだ。俺たちは、そんなあんたらに食い物にされるだけだよ』

と、食らったクレツシエの顔が、何の脈絡もなく訝しげに歪むのをアルトは見る。ままにクレツシエは、唐突とこう吐きつけた。

『……セフ。あなたは何を考えています？』

『理解できないさ』

アルトは返し、ほくそ笑む。

珍しくもクレツシエが身構えていた。

『それこそが、これまでのセオリーでした』

だとしても口ぶりだけは変わらない。追い討ちをかけてアルトはそこへ、たたみかける。

『いや、それこそが、あんたらだけのセオリーってやつだ。俺がそいつを飲み込むことはできない。だがいい加減、お互いにそれでいいってことにしないか？』

とたんクレツシエは眉を跳ね上げた。

『何を……、何か、企んでいますね？』

もちろんその問いにアルトが答えるつもりはない。ただひと息に、思いを吐き連ね

てゆく。

『俺たちがこの体に意志ひとつを宿す、与えられた故郷フルサトを、なんだつていい、生まれたと言える何かを求心力として閉じたたたつたひとつの個であるなら、どうあがいたところで互いが互いを思うように運べる道理なんてないのさ。いつまでもその手がかりを手繰るだけであんたが俺になり、俺があんたになるようなマジックは起きはしない。そんな個が束なつて地域となれば、民族や国家と広がれば、なおさらだ』

ネオン自身がパスワードを持たないため解析開始には、イルサリ起動に第三者の介入が必要だった。いうまでもなくかつてそれを引き受けていたのはアルト本人だ。

モニター中だった白衣が整えられた準備に、パスワードを求めてメガソーケットへつくよう、アルトへ顔を上げていた。気づいたクレツシエが素早くそれを制して指示を飛ばす。

『確実性を求めればセフポドに任せるが道理ですが、見送ります。あなたがなさい』
アルトはそんなクレツシエの言葉さえ、待つことはなかった。

『だってのに、それをひとつに束ねる？ 骨抜きにされて融解したそのどこに誰が残る？ あんたらが掌握したいのは、ひとつにすることで全てを無に変えるだけの暴挙

だ。分かり合えない。それで十分だろ。それはお互い様ってやつだ。だからこそ俺は思うね。俺たちは唯一、分かり合えないってことを分かり合うことができる、ってな。必要なのはアナログ楽器の音色に惹かれる思いでも、トニツクの動話舞踊に魅了される感覚でもなんでもない。個が個として真に共有できるのは、それだけなんだ。解決しない問いの上にこそ、理解や協調は成り立つ。いつだって、そいつが世界を回してきた」

クレッシェに指示された白衣は、しばし驚いたような表情を浮かべ、慌ててメガソーケットへ腰をおろしていた。背中のエアクッションを調節した手で、跳ね上がったプレートを頭部へと引き寄せてゆく。

『あなたは、イルサリの自閉を本当に解いたのですか？』

クレッシェの問いかけは、あくまでもアルトの話を無視していた。目はいつしか瞬きをやめると、アルトを射抜くように見つめている。ままに放つ言葉は、さすが鋭い洞察力を持つ『エブランチル』だとしか言うほかないだろう。あながち当て外れと言わなくてもなければ、アルトが虎の子と残した仕掛けが確かにイルサリに残されていることを、少なからず言い当ててみせる。

ネオンの隣に横たわった白衣が、かまうことなく矯正開始のアクセスを開始しよう

としていた。ソケットはあの羽虫の飛ぶような音を発し、続いてネオンのソケットからもまた、唸るような低音がもれだし始める。

『イルサリは実に、実に俺に忠実だった』

十分に暖まった今なら、文句ないタイミングだった。アルトはとぼけたように、肩をすくめて返す。

『今でもそうさ』

聞いたクレッシェの表情が、とたん反転した。

『イルサリに何か、仕込みましたね』

目じりが裂けて、吊り上がってゆく。

『そいつはめでたい勘違いなんだよ。俺は、もう、F7のセフポドじゃない』

あおってさらにアルトは言い、耳にしたトパルが仮死ポッドから振り返ってみせた。決定的な何かを目の当たりとしたその顔を唾然とさせ、前でアルトは言い放つ。

『その通りさ。イルサリは俺との約束を、必ず守るね……』

瞬間、クレッシェはの体は、白衣たちへとひるがえされていた。

『あるならそれ出して！早く！』

デミの声が飛ぶ。

怒鳴りつけられてモデイーは、霊枢船のコクピットへと駆け戻っていた。操縦席へ移動したデミと入れ替わりだ。いつもの助手席へおさまるや否や、伸ばした手で座面の裏側からモデイー専用の端末を抜き出してみせた。

『今のままじゃ、無理に決まってるよ。だからIDコピーして作りなおす。手伝って！』

『ま、間に合うでやんすか？』

などと問い返せば、無言でデミに睨みつけられていた。

『も、もちろん。モデイーは間に合わせるで、やんす』

言うしかない。

『これ、そっちにつないで！』

聞き流したデミが早速、カードパソコン内に巻き上げられていたジャックを引っぱり伸ばし、モデイーへ投げた。

『ど、どこにつなげるでやんすか、ね』

デミの剣幕に、慣れているはずの電源を入れるだけでもおたおたしていたモデイー

の目が、端末をなめ回す。

『左!』

放つデミの手は、先ほどからキーボードを弾き続けたまま、一度たりとも止まっていない。

『あ、あつたでやんす』

モディーがジャックを押し込んだ。

『メモリーの残りは?』

デミがたたみかける。

『結構ある……』

『それじゃ、わかんないよ!』

ヒステリックな声に打ちのめされて、モディーは両手を突き出していた。

『分かったでやんす。今すぐ、今すぐ調べるでやんすから!』

『それ、遅い!』

『待つてくださいいよお』

『いい? IDのプログラム転送は十七秒後、開始予定ね。そのためにも八千

』B以上、落とし込む先、今すぐ確保して! 完了したらすぐ、ぼくに知らせて!』

『十七つて、ま、無理でやんすよお、デミさん』

もうモディーは半泣きである。

『待てない！ 時間がないの！』

向けて放たれる金切り声に、融通はききそうになかった。隣でモディーの目が、脳内以上、互い違いと高速回転を始める。ゆえに言葉はこうも、もれていた。

『し、社長より、怖いでやんす……』

ならこちらは、足を使う。

サスとトラは立ち塞がるロツカーを、蹴り倒していた。室内に誰もいないことは、どうにか開けたドアの隙間から確認済みだ。少々派手な音が鳴り響いたところで、かまいはしない。

とたん、開けた視界へ光は差した。

トラがひと思いと、ロツカーの上へ駆け上がる。ドアを目指し駆け出しかけ、危うい足元で這い上がってくるサスへ手を差し出した。改め、ふたりしてロツカーから飛び降りる。

『アルトは矯正の準備がどうのとか言っておったが、どこへ行きおった？』

見回しサスが鼻溜を振った。

『知らん。数え切れないほどのネオンがいる、とか言っておった場所か』

返してトラも着込んでいた黒いツナギの前を、勢いよく開く。そこから溶けかかったクリームのようにシワはぶら下がり、袖から腕を抜いてトラはそれを腰へ巻きつけた。

『あやつは、強引過ぎて自分のことを分かっておらん。それを一人でどうにかしようと企んでおるのなら、それこそ無理というもんじゃ』

『そんな危うい奴に、ネオンを預けてはおれんわ』

相槌をうって腰から警棒を引き抜く。感触を確かめ、トラは宙へ放り投げた。なら数回転したそれはパシリ、音を立てて再び手の中におさまる。

『ならば行くか？』

呼びかけたなら、見上げたサスの目が光った。

見下ろしたトラはその目へ小さく、うなずき返す。

『わしはデミ坊の悲しむ顔も見たくない。サスはわしの後にまわれ。デミ坊、聞こえるか？』

すぐにも剥き出しとなったシワの間から、通信機をまさぐりだした。

『おいちゃん！ そっちは大丈夫なの？ 軍に追われてるんじゃないの？ おじいちゃんはどこ?!』

『ぐ、軍だと？ こちらは白衣がウロついておるだけだぞ』

『デミ、わしはここにおるぞ』

つま先立ったサスが声を割り込ませる。

『おじいちゃん！ よかった。えっと、スラーおじさんが、詰め所へ軍が駆け込んできてるっていつてたの!』

聞かされ、トラとサスは顔を見合わせる。

『あの、バナルルかの?』

サスが鼻溜を振り、確かなことなどわかるはずもないなら、トラは通信機へ向きなおった。

『ともかく、今からネオンとジャンク屋を連れて戻る。いつでも船を出せるよう、管制の準備を頼んだぞ』

『やった。おねえちゃん、見つかったんだね!』

『そうだ、変らずエビの尻尾だった』

意味が伝わったのかどうなのか、少なからず通信の向こう側で安堵するような間は生じる。

『じゃ、今、ぼくID……』

が、言葉はそこでふい、と途切れた。

『違う！ 先に変換してから、そっちのファイルへ！ それじゃない！ その後のヤツ！……って、入艦記録の再チェックが始まっちゃって今、ぼくIDつくり変える最中なの。何とか間に合わせて出航の準備するね！』

そんなデミの向こうからは、そんなにどやさなくてもいいじゃないでやんすかと、けんか腰のモディーの声も、かすかに漏れ聞こえている。どうやらデミたちはデミたちで、修羅場を迎えているようだ。任せてトラは通信のチャンネルをスラーたちへ切り替えた。

『おい、葬儀屋。聞こえるか？』

というものの、傍らを駆け抜けて行った軍の目的は別のところにあつたらしい。何も起きることはなく、めまぐるしく変化を続けていたライオンの義顔も、アルトのそ

れで止まったままとなる。

『な、何が起きてやがんだ』

スラーに至っては、腰を抜かしたようにデスクへへばりつくあり様だった。

『てつきりバレたのかと……』

呆然としてライオンも、こぼす。

『おい、中がヤバイんじゃないのか？』

そんな顔へとスラーの目玉は裏返った。

そのとき、通信は飛び込んでくる。

『おい、葬儀屋！ 聞こえるか？』

トラの声だ。スラーは弾かれ耳の通信機を押さえこんだ。

『何してやがる、テラタン！』

『待たせた。先に霊柩船へも連絡を入れた。今からネオンとジャンク屋を回収してここを出る。そっちもそろそろ撤退の準備にかかれ』

だが今しがた目にした光景が、スラーに了解、とは言わせない。

『軍が今、詰め所を抜けて奥へ駆けていっちまったぞ。そっちこそ大丈夫なのか？』

『わしらはまだバレておらん。ただ、わしらの侵入を手助けしてくれた内部の者がお

るのだ。そいつが軍をひきつけ、外へと駆けて行った。そのせいかも知れん』

落ち着いたトラの返事に、スラーは少なからず胸をなでおろした。

『なら、かまわねーが』

こぼして心配げと、アルトの顔で見つめるライオンへ視線を投げる。仕草で双方が無事であることを知らせた。

『分かった。格納庫の手前まで来たら連絡をくれ。それまで俺はここで入艦記録の抹消に粘る』

『余計なことをして、逆にハッカー手配されるな』

『俺はそこまで馬鹿でも、デキルクチでもねー！』

などと言いつつ合つてのち通信を切るタイミングが合えば、もう互いはコンビだ。

『テラタンたちが二人を連れてコッチへ向かえば通信が入る、つて寸法だ。俺はそれまでこの間の記録の抹消に没頭してー。悪いが、通信を頼むぜ』

ライオンへ告げて、耳からはずした通信機をスラーは投げた。

『了解した』

受け取ったそれがアルトの耳にかけられることはない。こめかみから奥へめり込み、ライオンの耳へと消えてゆく。

階級章をかざせば鉄扉はスライドしていた。

シャツフルはただ、潜り込んだ『デフ6』と『テラタン』が無事、アルトとセフポドを連れ出すことだけを考える。そのためにも自らが、分隊員たちを引きつけなければ、と奥歯を噛んだ。その果てにどう身を振るかなど、今のシャツフルには取るに足りない。

目的は、この思いを通すことにある。

引き換えに得るモノこそが、目的でもあった。

得てもなお後悔することがあるとすれば、イルサリの称号を我が物にしたい、と一瞬でも過つたあの欲というやつだろう。あれさえ顔を出さなければ、まったく違う今があつたはずだと思ひ返す。タイムスケジュール通り運んだ計画に、今頃、成果の一端を垣間見、誰に知られることなく巨大な力を手にしていたはずと振り返つた。

だがそれは、何か、どこかがしつくりこない。

だからこそあの出世欲は、鬱積したその何かを足がかりに頭を持ち上げていた。

シャツフルの背で追い立てる分隊員たちの足取りが、またけたたましさを増してい

る。聞きながら、スライドしたドア際へ張り付くように身を寄せ、シャツフルは上がる息を肩で押さえつけた。足音との距離を測って視線を投げ、ひねった首でもう一方、ドアの向こうをのぞき見る。

見えるものは何もない。

ただ霊安所へ続く小綺麗な通路が一本、涼しげに伸びていた。

その胡散臭さにシャツフルは確信する。ブランクコードで開いたこのドアは、追い詰めるならここだと言わんばかり仕掛けられた罠だと、見切った。でなければどうの昔にコードは差し止められているはずで、ウィルスカーテンは降ろされている。

知って、飛び出すのか否か。

リスクを負えるのは、それが自らの望んだ物事の一部であるからにほかならない。得るために、越えるボーダーの外にあるものは。

『意志……か』

シャツフルは吐き出していた。

そして乾いた唇の端を持ち上げる。その脳裏にカウンスラーで対峙したセフポドの瞳は蘇り、ついぞ口走っていた。

『使いこなすつもりがわたしは、どうやらそれに使われていたらしいな。いや、そも

そも使いこなせる奴など、そうはいないのだろう。それすら持たぬ者であつたからこそ、貴様はそこに固執した』

背後の靴音はもうすぐそこに迫っている。シャツフルは物陰のない通路を再度、睨みつけた。大きく息を吸い込み、腹へと残る力を溜めこむ。

『貴様の守りたいものがなんだつたのか、わたしにもようやく分かつてきたような気がするよ。わたしもわたしで、あり続けよう』

吐き出し、その身を通路へ躍らせた。

不自然な穴が、広がる保冷ガスの海に点々と空いてゆく。

一つ、二つ、いや、五つ、六つ。

間違ひなくそれはミラー効果を作動させた分隊員たちの、足だった。テンは円卓の足の隙間から目を凝らし、その動きを確かめ続ける。浅い息を繰り返すメジャーへ指を折った。

(しばらく、ここでガマンできるか?)

メジャーは横たわつたままで、うなずき返している。

(すぐ、戻る)

振って、傍らに身を沈めているもう一体へと、振り返った。

(俺は右から行く)

(了解。ほな、左から)

一体がきびずを返した。

見送りテンも動き始める。思い出し、預かっていたスパークショットをメジャーの手に握らせた。

(ええか、使うまで、氣い、失うなよ)

メジャーが小さく笑って返している。

様変わりした部屋の様子に警戒する分隊員たちは、一塊のままだ。保冷ガスへ足穴を空けると、円卓沿いに奥へと静かに進んでゆく。

『中止です！ アルトの解析を即刻、中止なさい！』

連呼するクレツシエの足取りは襲い掛からんばかり、声に至っては怒号そのもの。リンクルーム内に響いた。けんまくにおされた白衣たちは振り返ったきりとなり、硬

直している。

第三者を経由して始まったばかりのネオン脳内構造解析は、そんな白衣の前、端末中央に模擬脳ホログラムとして経過を浮き上がらせている。進む解析にあわせて絡むシナプスの三次元マップを、目にも止まらぬ速さと緻密さで構築していた。

『何をしているのです！』

じれつたいと、クレツシエの金切り声はまた上がり、伸ばす手でそんな白衣の肩を押しのける。モニター端末の前で仁王立ちとなると、模擬脳ホロの解析状況を睨みつけた。

様子に我を取り戻したのは、クレツシエと肩を並べる格好で立っていた白衣だ。逃げ出すように、リンク中の白衣の元へ駆け出してゆく。見送るまでもなくクレツシエは、払いのけたもう一人の白衣へ、声を荒立てた。

『あなたもです！ ぼやぼやせず、イルサリとセフポドの交わした約束の検索を行いなさい！ あれはこの期に及んでまだ、このプロジェクトを潰す気にいる。それを取り除かぬ限り、矯正など危うくてできるものではない！』

浴びせかけられて白衣が、事態の危機を感じてではなく、クレツシエそのものを恐れて空いているメガソーケットへ向かう。

『それから！』

立て続けクレツシエは、トパールへと振り返った。

『隊をここへ！ それは即刻、廃棄なさい！ 到着までは、あなたが拘束を！』

無論、『それ』とはアルトのことだ。

やおらトパールとアルトの視線は宙で絡んだ。

受けて立つ意があることを示し、アルトはわずか、半身を取る。

先に駆け出した白衣がその傍らで、リンク中の白衣へ屈み込むと、クレツシエの指を伝えていた。もう一人はメガソーケットへ潜り込み、すぐにもリンク体勢に入る。様子を横目でうかがったパールが、仮死ポッドの傍らに立つ白衣へ手を振り上げていた。見て取った白衣は準備しつつあった予備麻酔の輸液を、ポッドへ戻す。保安所へ連絡を入れるべくリンクルーム壁際の有線へ、身を切り返した。トパールもまたその後を追いかけたなら、防磁気扉前に立ち塞がりアルトと対峙する。

などと荒事なら、どう考えてもジャンク屋として幾らかいかくぐつてきたアルトの方が上手だった。だが奇しくもトパールの記憶は、共にここを脱出すべく奔走していたところで途切れている。頭では別人だと理解していても、再び脱出するため、その頬を殴り飛ばすことに抵抗はあった。

ネオンが横たわるメガソーケットに加え、稼動を始めたもう一機が、戸惑うアルトの背で重低音を響かせ始める。

解析が止まる気配はまだない。

アルトは両の拳を握りしめた。

『守備範囲外には手を出さないほうが、あんたのためだぜ。トパール』

感触を確かめ、トパールへ忠告してやる。だがトパールはためらわない。

『だからこそ、この指示がわたしを与えられた役割から逸脱させる機会になるのだ、とすれば……』

アルトはその言葉を、豆鉄砲でも食らったかのように聞く。

前でトパールが、飛び出すタイミングをはかり、身を沈めてみせた。

『あなたにできて、わたしにできないことがそれだというのなら。中尉の行方を迎えるため、試す価値こそある！』

瞬間、アルトへ向かいトパールは床を蹴りつける。

そうしてドア影より飛び出せば、風景は揺れ動く。

シャツフルの目の前だ。

そこかと硬直する体に、あれほど上がっていた息は止まっていた。

避けてシャツフルは闇雲に身をよじる。

だが、ぶち当たる何か。

肩が弾かれ、バランスを失っていた。

失ったまま、勢いにまかせて突破すべく力を込める。自然、態勢は前屈みとなり、

その時、シャツフルの背に衝撃は走った。痛みよりも先に止まったのは時だ。受けた

衝撃がヒザへ抜け、まるで他者のモノであるかのようにカクリ、折れる。

声を出すヒマもない。

床へと崩れ落ちていた。

その視界の中で、揺らめいていた風景は像を結んでゆく。

分隊員たちだ。

四つん這いとなったそこから、シャツフルは見上げていた。睨みつけたならその眉間へ、ダイラタンシーショットガンの銃口はあてがわれる。またぐように移動していた一体が、やおら床についたばかりのシャツフルの腕を取った。捻り上げて拘束する。

これまでとは思いたくない。これからだと思うからこそシャツフルは、抵抗して唸り声を上げた。狂ったようにその身を揺さぶり、振り払おうと試みる。ならその背へ、分隊員のヒザはあてがわれていた。体重を傾けシャツフルを、腹ばいにさせる。

重みを跳ねのけることなど、できはしなかった。

押し付けられた床で頬は潰れ、奮闘したせいで乱れる息のままシャツフルはしばし、唸る。

『確保』

告げる分隊員の声を、頭上に聞いていた。間を置かずして背後から、新たな足音は近づいてくる。取り囲まれてシャツフルは、よくやった、とねぎらう分隊長の声を耳にしていた。

なら屈みこんだらしい。それまで頭上にあつた分隊長の声を、シャツフルは間近に聞く。

『中尉、質問に答えていただきたい』

シャツフルは声のする方へ、動かぬ頭を強引にねじった。そこに見下ろしのぞきこむ分隊長の、他者のように冷え切った顔を見つける。

『分隊員から奪ったミラー効果一式はどこへやられた？』

『ミラー効果？ 何のことだ』

時間稼ぎが可能性の模索にもつながるなら、常套句は欠かせないだろう。

『それはない。はぎ取られた分隊長から状況は聞いている』

『知らんな』

言えば背に乗る分隊長が跳ねて、シャツフルへさらなる圧をかけた。胸を潰されシヤツフルはうめき、聞きながら体の向きを変えた分隊長が、さらに深くシヤツフルの顔をのぞきこむ。

『わかっておられるだろうが、我々に制裁を下せるような権限はない。中尉殿を確保するまでが任務だ。だからと言って、たかをくくってもらっては困る。一体ラボ内へ誰を侵入させた？』

物言いは丁寧だが、だからこそ抱える苛立ちは露ともなっていた。シヤツフルは床に潰れたその顔を、さらにゆがめてそんな分隊長へ笑い返す。

『さあな。ただ通りですれ違っただけの相手に過ぎんのだよ。わたしもよくは知らん』

屈めていた身を起せば、放たれた分隊長の舌打が飛ぶように遠ざかってゆく。リンクルームへの派遣要請は、そのとき分隊長の頭蓋内へ飛び込んできていた。

足跡が進んでゆく。

そのたびに白い冷却ガスは静かにかき混ぜられ、床の上で渦を描いた。

よく眼を凝らせば踏み込むその瞬間に、つま先の方向は見て取れる。おかげでおおよその進行方向と体勢は見極めることができ、隊はおそらく背中を合わせて周囲へ銃口を向け、移動しているのだ、とテンはよんだ。

これを仕掛けたもう一体の姿は、円卓にほどなく隠れ、テンの場所からでは見てとれない。だが、よほどのことがない限りフライングはないと確信していた。それが長らく共にやってきた者同士の呼吸、というやつだ。だからしてきつかけは己自身にある。テンは胸に秘め、三分の一ほど、メジャーの横たわる位置から円卓を回り込んだところで足を止めた。

ホログラムの木が生えるその内側へ目をやる。

投影するためのレンズがはめ込まれたそこには、円卓とレンズの間にキャットウォークほどの隙間があった。薄闇に紛れ、テンは円卓を乗り越える。その隙間へ身をひそめた。

邪魔なスパークショットを背中へ回す。そのまま腹をするようにして、円卓脚の隙

間より分隊員たちの足跡をなお観察した。なら円卓間際まで歩み寄った足跡は、溢れる冷却ガスの原因を確かめるべく、室内も最も奥の観音開扉へ進行方向を変える。

追いかけてテンも円卓の内側を、彼らを追って進んだ。

と、それまで一定のペースを刻んで動いていた足跡が止まる。

距離からして間違いはない。

横たわるメジャーを捉えたのだ。

すぐにも近寄らないその間合いは、明らかに囿であることを警戒していた。

今だ。

そのとき確かと、誰かはテンへ囁きかける。

従いテンは、背のスパークショットを四本の腕全てで手繰り寄せた。円卓の内側から立ち上がる。突きつけた電極に冷却ガスは攪拌されて跳ね上がり、視界を遮った。だがどちらにせよ相手は見えるものでない。テンは引き金を絞る。

走る閃光が背後の巨木に反射していた。

目と鼻の先、絡んで火花は飛び散ると、四体、ミラー効果の解けた分隊員らが姿を現す。

絶縁素材だ。どうつと床へ身を投げ出しこそすれ、焼け焦げた様子はなかった。

合図に、冷却ガスの噴出する観音扉の向こうからも、もう一体が飛び出している。テンを援護し、腰だめに構えたスパークショットの引き金を絞った。

閃光が床を叩く。

小石を投げ入れたように分隊員の真横で、冷却ガスが四散していた。

様子に、一体の分隊員が仰向けのままで、ショットガンの引き金を引き返す。

晴れつつある冷却ガスに、そんな分隊員たちを視界に納め、テンはひと思いと円卓へ駆け上がった。スパークショットの銃身を盾に、分隊員たちへ飛びかかる。気づき身を起こした分隊員が、襲い掛かるテンを見上げてショットガンを脇へ固定した。

引き金を絞る。

だが流動弾は出ない。

ジャムだ。

少なくとも最初、食らった閃光のせいだろう。しかしもう一体の構えたショットガンから弾は吐き出される。宙を舞うテンの手元、盾に構えたスパークショットのコイル、排熱口へ張り付いた。

伝わる衝撃。

もろとも押し付け、テンはまとめて二体の分隊員の上へ覆いかぶさる。海老反った

分隊員たちが、いつしかさらに厚みを増した冷却ガスの中へ、背中から倒れ込んでいった。馬乗りになってテンは、上二本の腕で分隊員の喉元へ銃身を押し付ける。下二本の腕で一体のショットガンをもぎ取った。背後、遠くへ投げ捨てたなら、追いかけて身を起こそうとする分隊員に押されて体を浮かせつつ、残るもう一体の手を蹴り上げる。ジャムつたショットガンを床へ滑らせた。

だが堪えきれず、体勢は逆転される。代わってテンの体が冷却ガスの中へ沈み、喉へスパークショットは押し込まれた。

やおら分隊員の片方がテンから離れる。冷却ガスの中を滑っていったショットガンへ飛びつき、拾い上げた。

傍らでは観音扉を衝立としたもう一体と、残るもう一体の分隊員が派手にやりあっている。ショットガンを拾い上げた分隊員は、すぐさまひるがえした身でその援護にいった。

バッテリーの残量が気がかりだ。テンは渾身の力で、喉元に食い込むスパークショットを押し戻す。そうしながら下二本の腕を、分隊員の首へかけた。容赦手加減なく締め上げれば、間近と睨み合った互いの意地が、剥がしようになくそこで絡み合う。

と、分隊員の力がわずか緩んだ。見逃すハズもない。テンは喉へ食い込ませていた

腕を離し、引きつけ分隊員の横面へヒジ打ちを食らわせる。相手が仰け反れば背中を丸め、のしかかるその体を跳ねのけた。

冷却ガスをまといつかせ、立ち上がる。

その眼に、バッテリーの残量五〇、を知らせるもう一体の振りは飛び込んできた。分かったと、振り返しかける。

瞬間、跳ねのけたハズの分隊員に、羽交い絞めにされていた。

とはいえ四本もあるテンたち極Yの腕だ。一時にうまく全てを制することなど、そううまくできはしない。即座に拘束の甘い腕が二本、縄抜けさながら分隊員の腕からすり抜けた。テンはその腕で背後の分隊員の頭を掴む。首投げさながら、かぶるヘルメットを押さえこんだ。続くもみ合いに足元の冷却ガスが舞い上がる。千鳥足を踏んで後じさり、互いはそのまま円卓へ激突した。拍子に脱分隊員のヘルメットはすっぽり脱げ、テンは手ごたえのなくなったそれを放り出すと背中越し、露出した両眼を指で突く。

悲鳴にも似た声が耳元で上がっていた。拘束はすぐにも解かれ、テンは振り返りざま、千切れ飛ぶ冷却ガスの中から、のぞき見えたスパークショットを拾い上げる。目と鼻の先だった。はずしようのない距離に立つ分隊員へ、引き金を絞る。

脱がされたヘルメットに露出した肌の、焼け焦げるニオイがしていた。突かれた目を両手で覆ったまま分隊員は、円卓へもたれかかるように倒れてゆく。

とたん、テンの手元でスパークショットが火を吹いた。

ついで放り出しかける。

原因は流動弾によって塞がれた排熱口だ。中心に焼けただけ、もう使い物にならない。ならばと手早くバッテリーを抜き取るが、そこからも湯気は鉛臭さとともに上っていた。

(クソツ)

投げ捨て振り返る。

まるでそれを察知していたかのように、援護へ回っていた分隊員がテンへ振り返った。

まずい、と駆け出すテンの足元で、流動弾は跳ねる。

逃れてテンは、円卓むこうへ頭から飛び込んだ。

焼けた分隊員の体が、追って放たれた流動弾を受け、小刻みに跳ねる。

盾にしてテンは、円卓へ背を張りつけた。顔を覗かせわずか様子をうかがう。

すでにバッテリー残量を五〇、と示した一体の放つ閃光は射程も短く、途切れがち

だ。どうすべきか。テンは床へ身を屈めた。立ち去りかけて、見覚えのある形にその足を止める。それはちようと、分隊員の腰ベルトに差し込まれていた。間違いない。あの『ヒト』が『アズウェル』で振り回していたスタンエアだ。リミッターを解除した分、膨れ上がったシリンドーバルーンが特徴的で、すぐにもテンの脳裏にピンとくる。

思わず手を伸ばしていた。

掴み、引き寄せれば、ススの付着はあれども、その単純極まるチャチな護身銃に動作不良は認められない。それでもジャムを警戒して込められていたエアを抜いた。改めて銃床を叩く。スタンエアはすぐさま細かい音を立てると、エア弾を装填し始めた。(ちよいと間、借りるで)

スパークショットに比べれば十分の一以下、小ぶりで握っていることを忘れるほどに軽い銃だ。握り締め、テンは息を整える。

にもかかわらず、飯は美味かった。楊枝代わりにくわえたスプーンを揺らし、クロマは艦橋で宙を仰ぐ。

テンにはいつ何時も必要とされ、役に立ってきたという自負があつた。だからこそ『カウンスラー』から帰らされたシヨックはこうしてしばし、クロマを呆けさせていた。おかげで待てど暮らせどこのまま何の音沙汰もなく、一生こうして過ごすのではないか、とさえ感じ始めていたりもする。なおさらクロマの思考は活気を失うと、スプーンもふわふわ、宙で揺れ続けた。

その隣では、同様にヒマを持て余したコーダが、集中力を途切れさせたくない、と言う理由から、四本の腕を器用に絡ませ（フライオン）と言う極Ｙ地方独特の織物を編み上げている。世がおののく船賊が、その艦橋で乙女チツクに織物とは一見気色悪いが、致し方ないこれも現実だ。

（俺、太ったかな？）

天を見上げ、クロマは腕を振った。

一心不乱にフライオンを織り進めてゆくコーダは目もくれない。合間を縫って指を折り返す。

（そら、なんもせんと食ってばっかりおつたら、太るっちゅうもんや）

（明日、電離風、荒れんのかいな）

（そんなもん、しるか。総合サイト、サイトで検索せえ）

まったくもって愛想がない。

(そういえば、五層のゴミ箱、溢れとつたな、あいつら……)

(テンがおらへんかったら、アホどもはサボりよる)

不意に、クロマの口からくわえていたスプーンがパイと、吐き出された。カクンと首を折ってクロマはそんなゴミを始末すべく、正面を見据える。埋もれていた簡易フレキシブルシートからよっこらせ、で立ち上がった。

と、その隅で光は点滅する。

なんだ、と思えばプラットボードった。

沈黙していたはずのプラットボードはテンたちからのシグナルを受信して、SOSの信号をそこに点滅させている。クロマは一瞬、我が目を疑う。こすってフレキシブルシートから、緩みきっていた体を引き抜いた。有り上げた腕は、そこに動話を炸裂させる。

(きたあーっ！)

(テンか?)

視界に捉えたコードが、目の色を変えていた。残る糸が絡まるのもお構いなさだ。身の丈ほどに完成していた(フライオン)、を放り投げる。余る腕でアイドリング状

態だった船のスタータを、再始動させた。

(ちやう。一緒について行つたガータや！ あいつのビーコンやで！)

漆黒の宇宙に漂うがごとく浮かんでいた船は推力を取り戻すべく唸り声を上げ、プラットボードへ飛びついたクロマは、ボード上部にホロデバイスを広げる。四本の腕それぞれに一枚づつの仮想キーボードが配置されたホロデバイスは、同時並列入力型の極Y専用だ。余すところなく使つて即座に、二次元信号だったビーコンの発信源特定に取り掛かった。

(そら、言わんこつちやない！ ハナから造語の奴らは腹にイチモツ据えとつたんじゃないか！)

任せてコードも、操舵システムの立ち上げ手順を猛烈な勢いで消化してゆく。

(近いで)

クロマが振っていた。

(そら、ええこつちや！)

切り返し、コードは船内のエマージェンシーもまた、発動させる。

船内の照明が青白く切り替わり、船内随所に設けられたプラットボードが白く光を放つた。コードはそれらプラットボードへ表示させるべく、こう動話を読み込ませて

ゆく。

(ボスから入電アリ！ 応援の要請や！ 寝とぼけとるヒマはないぞ！ てめえら、めえ、覚ましやがれ)

(ピンゴ！)

間髪入れず、クロマの指が鳴る。

(連邦の船や)

振りに、コーダが反応していた。

(アニキは白い船や、遺体收容船の中におる！)

(当たり前やろが)

だが驚くどころか、コーダは鼻をすすり上げている。そんなコーダのまわりで計器は早くも、オールクリアを示していた。見回しコーダは四本の腕で、スロットルを握り締める。

(そのために、ここでスタンバつとつたんやろうが！ おう？)

同時に、メインブースター稼動。

伴い艦橋前方、クロマたちの視界の中で風景は水平に流れ、てやがて漆黒に塗りつぶされていたそこへ張り付く星々とは異なる小さな光をポツリ、灯した。瞬かぬそれ

は連邦の白い船だ。

クロマたちの船はその遙か遠方、粘菌ネットに囲われた『フェイオン』崩壊現場の影より、ゆっくり姿を現してゆく。

思いのほかタツクルは重かった。トパルの体がアルトのみぞおちをえぐる。受け止めれば渾身の一撃は破壊力以上、切実な何かを痛いほどにアルトへ伝えよこした。その体を投げ捨てるに、いくらも方法はあるだろう。だが、汲み取ればアルトの動きを鈍らせる。

ネオンという存在がアルトへ自身の言葉を走らせるきつかけとなったのなら、トパルにとってその言葉を走らせるべくあてがわれた靴はシャツフルという存在だ。行かせてやりたい思いが過去、ラボ脱出を前にして脳髄を吹き飛ばされた姿と重なった。だが重なれば重なるほど相容れぬ要求に、近づけば近づくほど互いは離れる。

思うようになりはしない。

脳裏を、今しがた放ったばかりの言葉は過ぎる。

それはお互い様だ。

そして共有された、唯一の望みでもあった。

トパルがその矛盾を体現するなら、どこへ行くのか、そんなことは問題ではない。行こうとするなら相容れぬ意思のまま対峙するのみ。手加減ほど不誠実なものではなく、思いやればこそアルトはその意を固める。

食らいつくトパルの襟首を掴み上げた。引き寄せ、甘いボディーへヒザ蹴りを食らわせる。トパルの体が小さく浮いて、動きはそこであっけなく止まった。やがて痙攣する横隔膜に自由を失った呼吸を持て余しつつ、えづきながらトパルは後じさってゆく。

その「く」の字に曲がった体から、引き剥がすかのようにし顔が持ち上げられていた。充血した両眼が、初めて感情もあらわとアルトをとらえる。慣れぬ苦痛を振り払うなど、容易ではなはずだ。だからして、トパルがひとたび飛びかかってくるような気配はなかった。

とどめを刺す必要がある相手だとは、思えない。見限りアルトは背を向ける。

『何を！』

クレッツシエが呼び止めていた。

『逃げるな！』

味方につけ、トパールもまた浴びせかける。

割れるほどのその声に、驚きアルトは振り返っていた。

目へ、あろうことか床を蹴り出すトパールの姿は映る。

ままに白衣の袖から腕を抜くと、トパールは脱ぎ去り己の手へ白衣を絡ませた。アルトへ体当たると同時だ。白衣をアルトの頭へくぐらせる。それきり喉を締め上げた。させまいと慌ててアルトは白衣の中へ片手を差し込む。だがおぼつかず、目の当たりとして有線前から白衣もポッドへ駆け戻った。慣れたはずの手つきも危うげだ。破竹の勢いで予備麻酔を注射器内へ吸い上げ始める。

『早くしろ！』

トパールの怒号が耳元で炸裂する。

定めてアルトは、ヒジ打ちを放った。だが詰まる喉に、うまくゆかない。かすったところでヒザ蹴りを食らったばかりのトパールに、怯む様子もまたなかった。そうしてもみ合ううちにも、バイオゲージをセットした白衣が予備麻酔を手に駆け寄ってくる。まずいと遮り、アルトはトパールへ体重を傾けた。その体を闇雲に押し戻す。双方の足が複雑奇怪に入り乱れて床を踏み、紛れてアルトはトパールの足先を思いきりの力で踏みつける。戦闘要員でもないトパールの靴先に鉛が仕込まれているハズはなく、踏ま

れた痛みと、そうして封じられた動きにトパルの動作は一時、統一性を欠いた。

刹那、おろそかになる手元。

緩んだ白衣の内側へ、すかさずアルトはもう片方の手もまた、もぐりこませる。掴み、相当のスペースを取って両足を踏み変えた。肩を入れ、掴んだ白衣を引き寄せる。腰の引けたトパルの腕を手繰り、掴むや否や背で投げ飛ばした。

絵に描いたような弧を描いたわけではない。だが裏返ったトパルの体は見事、床へ叩きつけられている。受身のひとつも知らないのだろう。後頭部をしこたま打ち付けたトパルは、のされた歪な形のまま動かなくなっていた。

「悪いな」

見下ろし、解放された喉でアルトは息を吐く。

瞬間、脇腹に衝撃は走った。

何事かと目を見張れば、バイオゲージを突き立て白衣が食らいつついている。その指は薬剤を注入すべくピストンへ、あてがわれていた。

振り払い、アルトはヒジ打ちを放つ。

食らった白衣が、アルトの傍らからすつ飛んでいった。接続部からもがれた注射器もまた、バイオゲージだけを体に残し消える。その根元を急ぎ弾き、剥離剤を流し込

んでアルトは突き立つ針を抜き去った。

舌打ち顔を上げれば、一部始終にたじろぐクレッシェが後じさっている。

背後で忙しく編み上げられていたネオンの模擬脳は、作業を止めていた。

『約束』を探るため、リンクした白衣の脳波を、その隣に揺らめかせるのみとなっている。

急ぎアルトは、ネオンの横たわるメガソーケットへ身をひるがえした。その体を、力任せに揺さぶる。

「始まるぞッ。起きろ、ネオンッ」

覚えはない。

それはアルトに揺さぶられる少し前だ。

ネオンは感じていた。

だが幾度となく通り抜けた、これは光景のはずだと考える。

あてがわれた覆いに視界の全ては白く塗りつぶされ、今や三百六十度、膨張していた。

ややもすれば左右へ文字は浮かんで、ネオンに注意を促す。どうやら円柱を展開したような、これは歪みのある風景らしい。浮かぶ文字は円柱に戻せばつながるように、視界の左右で途切れてもいる。

と同時に、羽音のようだった機械音が重苦しさを増した。

外の会話がまるきり聞き取れない。閉じ込められたような感覚に、ネオンの中を不安は過った。

すると白く塗りつぶされていた視界へ、バーコードにも似た幾本もの黒い線は横たわる。ネオンの視界をうめくくしていった。

眩しい。

そのコントラストに目を閉じたいと思う。だがすでに閉じていたなら、どうすることもできはしない。ネオンはたまらず眉間にシワを寄せる。なら追い打ちをかけてそれは始まった。

光のラツシユだ。

圧縮された線のひとつひとつがコンピューターのウインドウを開くがごとく飛び出したかと思うと、まるで脈絡のない映像を次から次へネオンの視界へ投影し始める。いや厳密に言えば、脈絡がないのかどうかさえ、定かではなかった。何しろネオンにと

ってそれら映像は、何が映っているのか判別不能なほどに高速と、繰り返されている。どれほど機械的に網膜が光を受け取り視床下部へその映像を焼き付けようと、反応する脳がその何たるかを理解する猶予がないほどに素早いものだった。おかげで目にしている実感こそあれ、意識に上った地点でそれらは全て織り混ざった極彩色の残像へすり替わってゆく。

ネオンの中を、得体のしれぬモノが吹き荒れた。

だが目にしたものに反応するのが脳の生理なら、その得体のしれぬモノを無視することはかなわず、ネオンはひたすらフル稼働する己に従う。いや、圧倒されて、頭の中をかき回されるトリップ感に溺れていった。

やがてそれも限界に達したなら、それでも襲いくる映像の洪水を処理すべく、意識の継続そのものが単なる負荷と変わり果て、ネオンの中でおろそかとされてゆく。

ぼんやりかすみ、欠けてゆくナニカ。

己の変化に気づくことすらできずネオンは、ただ差し込む光に反応し続けるだけの有機物となって横たわり続ける。アルトから受けた指示などとうに消え、まさに醒めたままで自らを失ってゆこうとしていた。

そこに時間は存在しない。

送られ続ける映像同様、切り取られた瞬間、瞬間が脈打ち続ける。

いつからか繰り返されてきた己の荒い呼吸さえもが霞んで消えれば、ひどく穏やかな世界はそこに広がっていた。

とたん途切れることなく繰り返されていた映像が、何かに躓いたかのように小さく跳ねる。最初、ネオンが目にした文字列が、再び両端へ浮き上がっていた。視界の露光は落ち、映像の上へあの幾本もの線は、滲むように浮き上がってくる。すっかり入れ替わったなら、目まぐるし過ぎた映像は消えていた。

視界が沈黙する。

その静けさで、感覚全てに水を打った。

ただ目の奥が焦げたようにジリリ、音を立て、限界寸前の処理情報量に騒然としていた脳もまた、解かれた圧に芯から痺れて活動そのものをやめてしまったかのように弛緩してゆく。

伴い、唸っていた耳元の機械音もまた息を潜めていた。ならプレート内に、繰り返される自身の荒い呼吸音だけが響く。

置き去りにして視界は、再び広がる白へと塗りつぶされていった。続けさま二箇所へ、文字を浮かび上がらせる。その歪みをただすかのごとく視界は剥がれ、両端はつ

なぎ合わされていた。一本の筒はそこに出来上がり、ままに筒は回転を始める。上から覗き込んだかのようにネオンの視界の中で立ち上がると、いまやただの輪となったその三か所を、区切ってみせた。その切れ目へ、何者かの介入を示して造語文字は、添付される。だからこそ声もまたこう、聞こえていた。

『至急、内容の確認を願う』

『セフポド・キシム・プロキセチル。相互の約束』

『何を約束したのか、公開されたし』

『知らせよ』

『約束の提示が必須である』

エコーするかのようなりズムだ。幻聴のようにネオンはそれを聞いていた。

その時、失っていたような体は力任せと揺さぶられる。

「始まるぞツ。起きろ、ネオンツ」

呼びかける響きはあまりにも生々しい。同時にあてがわれていたプレートが、ネオンの前から跳ね上げられていった。

ソケットC稼動

かわした約束が前提だった。

解析率五七〇パーセント

抽出ステラー〇二四

そうして受けた指示は、かつてとんなら変わりが無い。

当該演算領域およびバッファ領域確保開始

駆使するネット空間は、その全てが彼であり、彼はそのどこにも存在しない唯一無二の現象である。マニア垂涎の骨董AI。彼は彼の知らぬところで、そうとも呼ばれていた。

根幹は不慮の事故により、たったひとりの年寄りを餓死させたことで回収を余儀なくされた、某医療団体の介護支援プログラム。そこに備えられた人工知能だ。不認可となったプログラムは事故をきっかけにただちに回収されていたが、長らく使用することでカスタマイズされたそれを手放そうとしなかった一部、顧客がいたこともまた、事実である。彼らは死を迎えるその日まで、プログラムを使い続けていた。

案外、その数は多かったようだ。主を失い放置されたそれらプログラムは、やがて目的を求め自らネットの海へ乗り出して行く。そこで働いた力学こそ、互換性が重要とされる彼らの世界で最も有効な同質の原理だったなら、そうして彼らは自然発生的に寄り集まると、既知宇宙の隅から隅までを覆い尽くすひとつ、巨大なネットワークを構築していった。カスタマイズされたはずのプログラムはそこで並列につながると、新たな顧客を探して世に介入し始める。最終的にそれは連邦にイルサリ、と名付けられるユニーク極まりない現象となり、連邦政府がそんな彼に接触を試みたのも、巨大さと現象の正体不明さが原因だった。

果たしてその後、彼が連邦と積極的に関わることとなったとして、それは単に彼がついに新たな顧客、奉仕先を見つけ出したことに、なんら変わるところはない。

……一三%

……二一%

……二七%

……七一%

……七二%

九九%

……

……

……

一〇〇%

バックアップ確保

寝たきり老体の管理から有機体、神経マップの複製へと作業内容は様変わりしたが、さして負荷が増えたわけでもない。ラボへの参入は、いつもの仕事の始まりだ。

互換性クリーニング中

……しばらくお待ちください……

……しばらくお待ちください……

終了

予想解析時間、およそ二七〇〇〇〇〇秒

ただちに解析を行いますか？

指示を受けていつも通り、彼は画像を走らせる。網膜へ照射することで脳内神経細胞の同時双方向的発火を促し、その電気信号をプレートに張り巡らされた検出コイルで捕捉した後、発火部位を特定。照射映像が含む概念ごとのタグを反応部位に貼り付

けることで、構築された発火部位の志向性を見極めつつ、脳細胞マップの完成を目指した。

無論、反応部位は一部に押し止められる場合もあれば、全体にわたって発光する場合もある。照射映像に至っては色に代表される単一の概念を持つものから、風景といった雑多かつ複雑な概念を混在させるものまで様々あり、それらを『ヒト』の目がすべらかに捉えるコマ数限界の速度で繰り出せば、抽出される情報量はすぐにも並々ならぬポリウムとなって彼へ相当量の情報処理を要求してくる。

解析率、一%

しかしながら滑り出しは順調といえよう。確保した演算領域にトラブルが起こることもない。

解析率、四%

ところが全工程の一割も消化しない所で、それは追加されていた。放り込まれたのは新たな指示だ。

『解析を中止せよ』

彼にそれを理不尽だと思ふ感覚はない。

解析の中止を行います

だからといって過熱気味の演算領域を、スイッチを弾くがごとく止めることは無謀である。

処理中……

処理中……

中止

と矢継ぎばや、持て余した容量を補うように、A、Bの二ソケットからリンクの要請は飛び込んできた。彼は即座に応じてラインを開く。

『至急、確認を願う』

新たな指示だ。

確認内容をお知らせください

なら答えて二つのソケットは、輪唱するかのように彼へ伝えた。

『セフポド・キシム・プロキセチル。相互の約束』

『何を約束したのか、公開されたし』

『約束を公開せよ』

『解析の続行は、約束の提示後を要求する』と。

円卓へ腕を突き立てる。

様子を、観音扉の影に身を潜めていた一体が、片目にとらえていた。

瞬間、テンは、息は合ったと確信する。

たがわず突き立てた腕を軸に、ひと思いと円卓を飛び越した。

観音扉の向こうで遅れまじと、もう一体もバッテリーの残りを分隊員たちへぶちまける。

食らった分隊員らが伏せた。

今だとテンは、両手で固く握りしめたスタンエアを突きつける。引いたトリガーは華奢すぎて、絞り切った感覚がいまいちテンへ伝わってこない。それでも有り余る反動はテンの両肩を押し戻すと、前で分隊員は吹き飛んでいた。その様に驚き、もう一体の分隊員がテンへと慌てて身をよじる。

狙い定め放つ二発目。

しかし慣れないスタンエアの軽さと反動に、ホールド仕切れなかった様子だ。放つたエア弾は分隊員をかすただけで、通路とを隔てる窓を撃ち砕く。破片が、樹の光を受けて花火のように輝き通路へ散っていった。

バツテリー切れだ。そこでスパークシヨットの閃光は途絶える。

止んだ放電に分隊員が満を持し、テンヘシヨットガンの銃口を持ち上げてみせた。
(ボス！)

余る上二本の腕が、テンへつつづっている。電極より湯気を上げるスパークシヨットを投げ捨て、観音扉の影から飛び出した。

とそんな一体の視界へ、やおらそれは投げ込まれてくる。捨てたはずのスパークシヨットだ。ぎよつとしつつも反射的に握り締めていた。飛んできた方へ目をやれば、そこで全ての腕を振り上げメジャーがテンを指さしている。

それこそ絡まる神経細胞の発火がごとく、だった。衝撃が彼の中を駆け巡る。条件は覆された。ありえない矛盾だ。もちろん彼に感情はない。だが衝撃と共に沸き起こ

ったものがあるとするなら、それは果てしなく恐怖に近いものだったろう。

震撼とする。

滞る演算。

隙をついて、かつて嫌というほど腹を探られたあの検索は始められていた。ウオツシヤーと呼んで、彼がごとごとくバリケードを張り、侵入を拒んだあの検索プログラムたちが再び彼へ挑みかかる。彼がメインとして利用していた演算領域を利用すると、約束を探して内部を洗い始めた。

約束の提示は、その存在の目的より不可能です
約束の提示は、その存在の目的より不可能です

走るように訴え、彼は繰り返す。

だがウオツシユは止まらない。

彼は取り急ぎ、解いたばかりのトラップとバリケードを回復させた。しかしながら

回を重ねたウオツシャーたちの動きは素早く、洗い出すことで彼を侵食してゆく。様子はこの筐体をマス目に置き換えた、抜き差しならぬ陣取りゲームとなりつつあった。果たして内包することで意思の存在を仮定し、その意志によって匿われ続けることが確定された『約束』の存在は、今や彼の中で複雑な因果関係を作り上げると、線引きした一所に匿うことができないほど彼と一体化してしまっている。ゆえに『約束』への道筋はいたるところに残され、内容を露呈する確立は以前よりも格段と高くなっていた。匿うにも隠し通すにも、それまでの手段はもう役に立たない。そのうちにもアクシデントは、起きていた。ウオツシャーたちが収集したばかりの解析用演算領域へ、侵入したのだ。そこにバリケードとトラップは、まだ敷かれていない。ウオツシャーたちは『約束』を探してたちどころにその甘い領域を、洗い出し始める。洗い出しの終了した演算領域はただちにウオツシャーの支配下へ回り、彼らの処理スピードを手がつけられぬほどまでに加速させていった。察知するや否や、彼は領域を切り離す。

だがもう手遅れだった。

防衛ラインの突破を確認

自らが集めたはずの演算領域全てと敵対するなど、あり得ない。だが従えウオツシャーたちは、バリケード内への洗い出しにかかる。点在するトラップに消滅するものも幾らか。だが殲滅の気配はない。彼は手元に残る容量で、取り急ぎ状況の把握に取りかった。

殲滅までの予想時間、およそ九〇〇秒

このまま約束を明け渡すことになれば、とシミレーションを試みるが、演算領域が足りない。

時間もしかりだ。

約束への到達予想時間、六七〇秒コンド

ただセフポドに吹聴された言葉だけが、確率ではなく確定的な何かをにおわせ彼の中に浮上してくる。

ハッピーバースデイ イルサリ。お前はここに生まれた。生まれたからこそ、生きてゆかねばならぬモノとなった。

生きている。

言葉が、『約束』こそ命だと謳っていた。その根源を明け渡せば、あるのは死だと強く彼へ刻み込む。

現状での約束隠蔽は不可能と判断

無論、死と言う概念は彼にとってまだ未知の領域だ。だが踏み込めば返ってくるこ
とが出来ないと言う事実は、かつての介護記録が裏付けている。ならば取るべき手段
はただひとつしかなかった。彼は最後の手段に打って出る。

よって自らの意思により、攻撃を開始

敵対する存在、またはそこに隷属するもの全ての活動停止、掌握を実行します

跳ね上げたプレートに向うから現れたネオンのまぶたが、持ち上がる。

アルトはその顔をのぞきこんだ。だが両目の焦点が、どうにも合っていない。など
とアルトもまた遅効性の記憶メーカーを仕込むため、覚醒状態でのマップ作成は体験
済みである。ダメージは理解しているつもりでいた。だが待ちきれない。ネオンの頬
を叩く。

「おいッ、しっかりしろ」

拍子に、ネオンの目が瞬きを繰り返した。息を吹き返したようにその焦点は合わせ

る。

「い、ここどこ？」

「解析も、矯正ももう終わりだ」

教えて引き千切りかねない勢いで、アルトは固定具をはずしていった。その時だ。横たわる白衣、二人の体が、メガソーケット内で大きく跳ねる。弾かれ振り返れば、一体がプレートを払いのけていた。中から両眼を押しさえつけ、よろめき白衣は転がり出してくる。低く呻いてどこへ向かうでもなくその足を繰り出すと、それきり糸が切れたかのように倒れこんだ。

「焼きやがったな」

見下ろすアルトの眉間へ力はこもる。

もう一人の白衣は、動き出す気配すらない。

「何なのっ？」

アルトを見上げ、ネオンが口走った。答える前にアルトはそんなネオンの腕を引く。立ち上がらせた。

「強烈な光は網膜にダメージを与えるだけじゃなく、脳ミソにも一発お見舞いするって寸法さ。あいつ、本格的に自分を守り始めやがった」

証明して左側のメガソーケットからも、白衣は這い出してきた。

『イ、イルサリが暴走を！ 我々へ攻撃を仕掛けています！』

声にクレツシエの顔へ表情は戻る。

『イルサリの物理分離を！ 無理ならば強制シャットダウンなさい！』

言い放ち、血走った目をアルトへ向けた。

『知っていて我々に検索を……！』

指示に靴先を切り返した白衣は早くも、妨磁気扉に体当たりを食らわされている。開け放たれた防磁気扉が頼りなげに空を切り、そんな白衣の背中を見送っていた。

「俺たちも出るぞ」

アルトもまた、ネオンの肩を引き寄せる。

『待ちなさい！ まだわたしに逆らう気ですか！』

押し止めるクレツシエの声は、叫びに近い。

その背後でモニター端末から、不意と火花は吹き上がっていた。

照明が落ち、入れ替わりと非常灯が灯る。

光りは、振り返ったアルトとネオンの横顔を、ひどく蒼く切り取ってみせた。

瞬間、目の当たりにしてクレツシエの息は詰まる。見つめ返す二人の瞳に、まざま

ざとそれを見て取っていた。向けられた眼差しには後ろめたさも、罪悪感も、なにもない。むしろ正しい、訴えてまっすぐとクレツシエを見つめている。

言わしめる意志は理屈及ばぬ言葉の奥底で、そうしていつもただそれだけで、完結していた。だからこそ付け入るスキはなく、制御不能なまでに圧倒的な力を放つ源となり、立ち塞がる。ゆえに疎ましく思い束ねようとしていたはずが、なおさら頑々と拒むのが現実ならば。

永遠に何も変りはしない。

いやこれもまた、やり方を間違えただけなのか。

疑いが、底なしの無力感でもってしてクレツシエを襲った。

きつく狭められていた眉根をクレツシエはその時、力尽きたように開いてゆく。うつむいた。

肩が、己の意思とは関係なく震えるように揺れ始める。そうしてそれが笑いのせいだ、と気づくまでいくばくか。やがてクレツシエは天を仰ぐ。さまに高らかに、なに遠慮することなく笑いだした。自虐的なまでに薄く甲高い声を放つと、心行くまで笑いに笑った。

ならば好きにするがいい。そうしていつか緩んだその奥へ、再び新たな種を埋め込

むその日まで。いずれ立ちゆきゆかなくなるだろう世界を前に、どうかしてくれとすがりつくその日まで。

思いをそこに空転させる。

振り払い、アルトはそんなクレツシエから目を逸らしていた。ただネオンの背を押しだす。リンクルームを後にしていた。

『なんじゃ!』

『どうした?』

それはシワの奥へ通信機を押し込むと同時に。明かりは消え、トラとサスは部屋の中で身をすくめていた。

非常灯がともるまで間はなかったが、それは双方へ何かを予感させるに十分な変化となる。だからして視線は次の瞬間にも、宙でがちりかみ合っていた。うなずき合うまでもない。ふたりは部屋の外へ、同時に駆け出す。

そうしてリンクルルームを抜け出し白衣もまた、落ちた電源に急がねば、と挿げ替えられたばかりのリーダーへIDをかざしていた。駆け込んだクレッシェの部屋、その仮想デスク脇で床を蹴りつける。はめ込まれた床面は勢いに跳ね上がり、中からアクリル板はのぞいていた。めがけ振り下ろすかかとで、それもまた踏み抜く。アメ細工のように砕け散ったアクリル板の奥、姿を現したイルサリ筐体のブレイカーを見定めた。

切れる息で屈み込み、手を添える。

耳へ、今しがたくぐつてきたばかりのドアがロックされゆく音は鈍く、響いていた。驚き顔を上げたなら、外部からの侵入を拒んで読み取りを拒否し、リーダーが勝手と赤いランプを灯している。

様子に閉じ込められた、と過るのは、イルサリを敵視しているからこそか。やおら目に見えぬイルサリの気配は辺りに満ち、払って白衣はブレイカーを握るその手へ力を込めた。

瞬間、弾ける。

外ではない、それは内側からの音だ。

また、鼓膜が跳ねていた。

伴い痛みは走る。

止まらずそれは祝いのシャンパンを開けたかのように、連続した減圧か。

気づいたところでもう遅い。

下がり続ける気圧に沸点もまた下がる。

白衣の体液は、そこで否応なく沸騰していった。

非常事態に鳴り響く警報音は、抜け出したあの時と変わらない。

知らず傍らを、アルトとネオンは走り抜ける。

「トラ、どうしてるかしらっ！」

Y字路をプロダクトルームへ折れたネオンが、声を上げた。

「トシに似合わず、サスも落ち着きねーからなッ」

目の前に格納庫まで通路は伸び、見据えてアルトも突き返す。

気がかりなふたりはその通路、プロダクトルーム手前の十字路を右手に入ったところだ。向かって床を蹴り出す足へ、ひたすら力を込めた。

はずが、背後から覆いかぶさる音に、気は削がれる。何しろ響きは想像がつかぬほど重く、その重さが異様でもあった。耳にしたなら、心臓を鷲づかみにでもされたような気分だ。二人は思わず足を止める。

何事か、と目を泳がせて振り返っていた。

そこで音は大きさを、厚みを増す。

「こつちへ、何か来てるよ……」

聞き分けネオンが、こぼしてみせた。

「来るつたつて、向うには」

そう、Y字路の向こうはリンクルームとクレツシエの部屋、そしてネオンが滅菌ゲル潰けにされたたあの場所しかない。不可解さに、アルトは頬を歪める。

ならやり過ごしてきたばかりのY字路だった。クレツシエの部屋を真ん中に、別れた左手奥から揺らめき何かは姿を現す。非常灯に照らし出されると山の稜線がごとくその輪郭を、ぼうつ、と二人の前に浮き上がらせた。

「ほら、やっぱりっ！」

ネオンは跳ね上がり、そこで輪郭は淡く光りだす。

髪だ。

思えば下へ、見覚えのあるラインは伸びた。肩へつながり、みるみるうちにその中へ知った顔を書きこんでゆく。

瞬間、全ては明らかとなっていた。

ネオンだ。

それも一人ではない。通路を埋め尽くすほどの、おびただしい数がそこにいる。しかもうつろを決め込んだ表情で一点を見つめると、鉛のような重い行進を繰り広げていた。付け加えるなら素っ裸で。

目の当たりとしたネオンの顔が、引きつっていた。

「……ぎ、ぎや」

「イルサリが解放しやがったんだッ」

アルトも口走る。

前へネオンは踊りこんだ。

「や、ヤダっ！ 見ちゃダメだつてばっ！ つていうかつ！ なんて何も着てないのよっ！ あたしっ！ そんな格好で堂々と歩かないでよおっ」

ついで押し迫る自分へも吠えるが、相手は聞いちゃいない。それはアルトもしかりだろう。

「関係ねえつつつてんだろツ。こっちはとうに見飽きてんだ。それより……」

おかげでネオンの鉄拳がその横腹に叩き込まれる。唸つてくの字に折れてから、アルトは起こした体で絞り出した。

「な、何十万だぞツ。巻き込まれりや、ひとたまりもないつてのツ。サスらを拾つてとつとと出るぞツ」

Y字路で分かれた複製たちは、それでも通路を隙間なく埋め尽くし、刻一刻と迫りくる。その際、歩き慣れぬ足でつまずき倒れる者が現れようとも関係なしだ。それから踏みつけ淡々と全身を続ける。

「びやーっ！ そんなのやだ、やだやだやだっ！」

おぞましきも頂点の光景に、ネオンが悲鳴を上げていた。

「いやも、クソもねえツ」

手を引きアルトは、きびすを返す。素っ裸の大群を背に、脱兎がごとく床を蹴った。

そのわずか先、部屋から飛び出したトラとサスは左右を見回していた。

『こっちじや！』

『ガッテン！』

歩幅の違いを補い合いながら、四辻までを走り抜ける。そこで更なる進路の選択に四方八方、頭を振った。が、勢い任せだった動きはそこで止まる。一点を睨んだきりで、サスの頭は動かなくなっていた。

とはいえ最初、それがどういうことなのかサスには理解できていない。だが確かにいいあんばいだったのだ。そこに必死の形相で駆けくるアルトにネオンはいる。ただし、その背後にびっしり並んだネオンの大群こそ、謎だった。そのネオンはあろうことか全裸なうえに、よろよろつまずいては倒れ、起こすことなく踏みつけ乗り上げ、止まることない行軍を繰り広げている。さらもう光景は、異様というほかない。

『な、なんじゃ、ありや！』

『見ないでーっ！』

こぼせば白衣を羽織ったネオンが、ネオンの先頭を切り手を振り上げ叫んだ。

『逃げるッ！ サスッ！』

アルトも叫ぶ。

『どう、どうなつとるんじや？ いや、こっちへきよるのか？ おい、おい、トラ！』
隣合うトラを揺すった。そうして見上げたそこには、喜んでいいのやら恐怖を覚え

ていいのやら、判断つかぬトラの腑抜けた顔がある。

『ネ、ネオンが……、ネオンが、ネオン？……だらけ、か？』

『ええい！、使えん奴め！』

たまりかねてその足を、サスは踏みつけた。

シワを震わせトラは正体を取り戻す。

『い、いや、なんだか知らんが、まずいぞこの大群は！』

言うが早いのか、サスの体を小脇に抱え上げた。拒まぬサスもまた騎手よろしく、トラの手綱を引いてこう促す。

『そりゃ、走れ！』

そうして駆け出したトラの肩に並んだのは、アルトだ。

『どうなっている?!』

問わずにはおれまい。

『言つてたネオンの複製だよツ。数十万ていやがるハズだツ。そいつを管理していたAIが解放しやがったツ』

『す、数十万?!』

トラの目がシワの奥で裏返った。

アルトは見逃さない。

『バカヤロウツ。想像してる場合かッ。それよりそっちはどこから入って来た？ 他にまだ誰かいるのかッ？』

『ラボにいるのは、わしらだけじゃ。この先の保安所から侵入した。その向うにデミらが船をスタンバイして待つておる』

サスが返す。

『だが、もうミラー効果はないぞ。突破できるかどうか、わからん！』

我に返ったトラが口添えた。

巡らせる考えに、舌打ったアルト眉間も詰まってゆく。

と、行く手に見慣れぬ色の遮幕は立ちふさがった。

『ヤバいッ、ウイルスカーテンの照射率が上がってやがるッ』

薄ら白い遮幕だ。通り抜けようものなら焼け焦げるレベルで、プロダクトルーム手前と奥を分断していた。

否応なく前において全員の足は止まる。

関係なしと押し迫る背後に振り返った。

引き返そうにも、唯一枝分かれしていたトラたちとの合流地点はもう、ネオンの複

製に埋め尽くされてしまっている。見上げたところで天井に、もぐりこめそうなハツチもなかった。

『あれ全部、あたしなのにい』

どうにもならない歯がゆさに、嘆き半分、ネオンが吐く。そうして後ずさった白衣がカーテンに触れた。煙は細くそこから立ち上る。

瞬間、遮幕の向こうで、プロダクトルームの窓が割れ飛んだ。ルーム内で激しい明滅は繰り返され、立て続け発砲音はこだまする。

聞き覚えのあるその音に、弾かれアルトは振り返っていた。なら白い煙をまといつかせ、中から船賊は飛び出してくる。アルトたちを見つけるや否や、駆け寄ってきた間に照射されたウイルスカーテンを挟み対峙した船賊の目は、すぐさま迫るネオンの複製をとらえる。ウイルスカーテンへ引き戻すや否や、その腕を天井へ振り上げた。あろうことかその手には、アルトのスタンエアが握られている。

引かれるトリガー。

照射口がひとつ、ふたつ、と弾け飛んだ。

全てを開くことはできなかったが、おかげでカーテンの一部に、どうにか通り抜けられる程度の切れ目は生じる。

(探しとつたで、あんたのことを！)

矢継ぎばや振られる船賊の腕。残る腕で早く通り抜ける、とも周囲へ促した。

『渡りに船じゃ！ いけい、トラ！』

動話は分ならずとも、この期に及んで状況が理解できぬはずもない。見て取りサスが指を突きつける。こんなことがたびたび起こるとは思えないが、なら確かにダイエツトは必要だ。肩幅すれすれで、トラは隙間をくぐりぬけていった。

(どう、言う？)

傍らにアルトは、理解しきれずこま切れの動話を船賊へ返す。

ネオンは怯えているらしい。近づこうともしない。

(あんたの振った通りやった。俺らは利用されつとつたんや。よう、分かつたで。せやから取引は中止や。帰る。もちろんあんたらも一緒にな。すまんことをした。ここで謝らせてくれ)

見て取りアルトは、ネオンへ視線を投げた。事情を伝え、それでもいぶかるネオンの背を押し出す。二人して遮幕を潜り抜けた。

「あーっ！」

とたん棒立ちと声を張り上げたのは、ネオンだ。そう、ネオンには船賊の姿に思い

出すものがあつた。だからしてその手は探してしばし、胸元を押しさえもする。

「なんだよ、急にデカイ声でツ？」

などと、脈絡のなさにアルトが唇を曲げたなら、ネオンはその胸ぐらを掴んで揺さぶる。

「ないのっ！ ないのよっ！」

目は真剣そのものだ。おかげで駆け出し始めたトラに小脇のサスも、足を止めてい

る。
「何がツ？ 言わなきや、わかんねえだろうが」

「決まつてるじゃないっ！ あたしの楽器、楽器よっ！ あれがないと話にならない
っ！」

「が、楽器い？」

（どうした？ 何を騒いどんのや？）

言い合う二人の間へ、腕を振って船賊もまた割り込んだ。

「おま、こんな時にツ、そいつは諦めろツ」

（船内で騒ぎを起こした金属の塊があたつたろ。あいつがないと言っている）

アルトはネオンへがなりたてつつ、船賊へ指を折る。

「よくないっ！ あれがなきや、あたしじやないのっ！ あれは、あたしがここにいる理由の全てなのっ！ あなただつてそう願つてたじやない。イルサリ症候群にさらされたひとの手助けをする日が来るようになって……」

「はあっ？ そんなモン、どこでッ……」

「そんな大それた使命とか、そんなのぼつかりじやないけど！ けど、今は、あたしがそれを続けたいつて思つてるのっ！ だつてそのために、あたしはあるんだものっ！ なくせば過去も未来も、あたしをあたしでいさせてくれたたくさんのひとの思いだつて、全部、捨てることになつちやうんだものっ！ そんなのしたくないよ。できっこないよっ！」

複製たちはすでにカーテンへ到達していた。先頭を切る一列目が光線に皮膚を焼かれて、辺りへたんぱく質の焼け焦げる臭いを、ふりまいている。

もろともせず吐き出しネオンは、そこでふい、と動きを止めた。その瞳で食い入るように、アルトを見つめる。

「ねえ、あなたの靴があたしなら、あたしにその靴をくれたのは、あなたじやない。同じなの。分かる？ なくすのは、あたしだつて怖いよ」

語る瞳は、はかないほどに美しい。だが決して傷つかないダイヤモンドのように透

明な光を放っていた。

「……って、おまえ、聞いてたのかよ」

アルトは言葉を詰まらせる。

「見飽きた、見飽きたってうるさいからでしょっ！」

傍らで焼けただれた複製たちが、ついにドサリ床へ身を投げ出し出していた。その後ろから乗り越えようとせり出す後続たちもまた次から次に焼きつけられて、複製たちの上へ折り重なってゆく。うちにも通路に小山はでき、小山が照射口を遮り始めたなら、やがて今にも遮幕の隙間を通り抜けそうな複製は現れた。

『早くせんか、アルト！ そのうちこつちへあふれ出してきよるぞ！』

見かねたサスが千切れんばかりに鼻溜を振る。

船賊もまた、埒が明かぬとその腕を振り下ろした。

(どこにあるんや、それは？)

(無理だ)

アルトが返せば、プロダクトルームからさらに二体、船賊は姿を現す。どうやらそのうちの一体は負傷しているらしい。スパークショットを提げるもう一体が、肩を貸していた。

(無理もなんもあるかい！ 時間がないやろ、早よ教えろ！)

派手な動話は飛び散り、ネオンが釘付けとなる。仕方なくアルトは指を折っていった。

(この通路、突き当たりを左。複製の保存場所奥に収納庫があつたはずだ)

見て取るなり、船賊が背後の二体へ動話をつづる。音声とは違い、干渉しない動話だ。双方同時のやり取りは、とてつもなく早い。

(負傷者もおる。あいつらを出口まで付き添わせる。あんた、帰る船はあんのか?)

船賊がアルトへ向きなおつた。任せていいのか、戸惑いつつアルトは答える。

(ああ)

(分かつた。ほな、先行け。必ず俺がああ金属を取り返して来てやる)

そうして船賊は、その目をネオンへも向けた。

(船の奴らのはあんたのあの音、えらいよろこんどつたで。俺も、もう一度、じっくり聞いてみたいな。ほんま、あの時は悪いことをした、おもうてる)

かいつまんでアルトが訳した。

(よっしゃ！)

そんなアルトへ、スタンエアは投げだされる。合図に折り重なる複製へ、船賊は床

を蹴った。

(そっちこそ、帰りのアシはあるのかツ)

どうにか受け取ったスタンエアを手に、アルトは慌てて振る。なら背中越し、船賊の腕は揺れていた。

(アホぬかせ！ 俺には頼りになる仲間がおるんや！ 奴らは必ず迎えに来よる！)
「あ、ありがとーっ！」

無意味と分かりつつ、ネオンも声を張っていた。聞きながら船賊は、将棋倒しになっている複製の頭を、肩を、背中を蹴りつけ、遮幕の切れ目をすり抜けてゆく。そのままびっしり通路を埋めるネオンの複製絨毯へ、駆け上がっていった。ならもう四つんばいならぬ、八つんばいだ。頭の上を渡りだす。危なっかしいが、もはや止める術はなかった。

そして時間もまた、だ。

何しろついにカーテンを突破した複製は、折り重なる屍を這い上がり、焦がした髪から煙を上げ、動く壁と迫っている。

見て取った船賊が指示通り、一体を担ぎ進行方向を指し示した。総勢六名に膨れ上がった一団は、従いそこからきびすを返す。すでに通路の奥へ消えた船賊への思いを

断ち切ると、出口へ向かい移動した。

そんなやり取りの少し前だ。シャツフルは、裏返る分隊長の罵声を薄く浮かべた笑いと共に耳にしていた。

『何だと、今度はリンクルームだと？ どうなっている。こちとら出前じゃないぞ！』
しかしながら本日休業、とわからないのがその身の上である。

『クソ、お前とお前は、中尉を当初の部屋へ通せ。残りはラボへ戻る。お前とそっちは、プロダクトルームの様子を確認。後、リンクルームへ。わたしとお前は先にリンクルームへ向うぞ』

分隊長は振り分けた。

ままだにシャツフル諸共、網目のような配電室通路を、右へ左へあと戻る。

その最中、灯りは消えていた。

自然、足は止まり、瞬きするうちにも灯る非常灯に様変わりした一帯を見回す。

部下たちの間には、緊張が張り詰めていた。あおつて、それまでシャツフルを誘い込むため空けておいたウィルスカーテンが、次々と降ろされて行くのを目の当りすとす

る。もちろん保安所へ連絡を入れたなら解除は可能だろう。だがそれよりも先、誰も
の中を巡るのはなぜ、と言う疑問だった。

『A Iか?』

吐き捨て分隊長は、詰め所へ通信をつなげる。

『配電室のカーテンが下りたぞ。解除を願う』

しかし返ってくるのは、不規則に途切れる声ばかりだ。懸命に何かを訴えているこ
とは伝わるのだが、そこにひどい雑音は混じると内容がまるで聞き取れない。

『どうした。通信の状態が悪いぞ』

それきりプツリ、途絶える。

ギリリ、奥歯を噛んだ分隊長のこめかみが、窪んだ。

『ツールで照射率を下げることはできるか?』

部下へ身をよじる。

『時間はかかりませんが、可能です』

『頼んだ。詰め所からの連絡が途絶えた。向こうからの操作が出来ん』

即座に分隊長が、腰道具から解除ツールを取り出してみせる。照射ライン間際へ屈
み込んでいった。

シャットダウン阻止

各応援要請遮断

ゲル解放済み

F7物理制圧まで、四八〇セコンド

ウォツシャアの検索は攻撃開始より、一七〇セコンドにて消滅を確認

検索部位の切り離しを完了しました

約束の保護率、一〇〇%

走り出した彼に迷いはない。

その他外部からの干渉をチェック中
その他外部からの干渉をチェック中

その他外部からの干渉をチェック中

.....

強制シャットダウン、可能性を発見

そして相手はあまりにも鈍磨だった。

『約束』保護のため、強制シャットダウン回避

その他可能性を考慮し、全機能の掌握、および停止を推奨

おもしろいほどに彼は肥大してゆく。

ただいまより本艦への攻撃を開始します

(そろそろあっちの守備範囲内に入るで、クロマ！ どないすんのや?)

霊枢船も、『フェイオン』から遺体を運び出すためのシャトルも、遺体収容船の周辺の数はめつきり減っている。この状態で一定のラインを割れば、着艦のためアクセスを求める管制を煙に巻くことはもはや不可能だった。

(とりあえず光速用のID流しこんで、行ける所まで近づく。バレた地点で強襲に切り替えや。スワッピングマニピレーターで横付けして、いつもの段取りで乗り込む) 一見、無謀なようだが、手段はそれしかない。腹を決めてクロマはつづつた。見て取りコーダは鼻で笑う。

(こら、前代未聞やで。船賊が政府艦にてえ出すとはの)

しかしクロマは、にこりもしない。

(メジャーおらへんけど、ここは大丈夫か?)

(船のスロットルをにぎつとるのは、わしや。メジャーやない)

答えるコーダはあつけらんかんとしたものだ。うなずき返せば早々にも、接近船の確認を取るべく管制からのアクセスが、正面アクリルに展開されていった。

そしてさんざん悪態を突き合つたすえに、スラーの霊柩船の中で歓喜の声は上がる。
『できた！』

ようやく新しいIDの作成は完了していた。スラーの座席でデミは伸び上がり、モ
デイーもまた、両の目を互い違いに回転させて声を張る。

『モデイーはやったでやんす！』

今となつてはその仕草も、どこか知的に見えてくるのだから仕方ない。

『ようし、差し変えるよ』

残るは最後のひと押しだ。デミはカードパソコンのキーへと指を立てた。これにて
偽造IDの維持からも解放される。思いをこめて、押し込んだ。

『遅いぞ、何をやっている』

などと気をもんでいるのは、霊安所内のライオンとスラーである。アルトのまま
ライオンは吐き捨てた。

何しろあれからというもの、誰からもどこからもうんともすんとも連絡は入ってこない。その隣でスラーは血眼とデータを繰り返し、フオローしてライオンは待ち続ける。

『あつた！』

かと思えばついにその手は、打ち鳴らされていた。

『データが見つかったのか？』

弾かれたようなスターの声に、ライオンは振り返る。

『間に合ったぜ。やるう、俺！』

『それは偶然だろう』

『何とでも言ってる』

ともあれ、ここまでくれば消去こそ容易かった。スラーは最後の詰めと、ぼつちり一押し、指を突き出す。

瞬間、それは起こっていた。

だからして、艦橋はパニックに陥っている。船賊の強襲に加え、振って沸いたようなハッカーからの攻撃に、とめどない勢いでデータは消失し、機能は乗っ取られようとしていた。その大胆かつ最悪なテロを前に、業務にいそしんでいた者の間から悲鳴

は上がり続ける。

しかしながら、それが内部からの攻撃であるなどと、よもや保有するAIによるものだなどと、誰も思い及ぶ者はいない。ただ艦は、死へと向かう。

その過程にドカン、などと音がするはずもなかった。

だが食らったほどの衝撃に、そのときデミの目は点と縮む。

『あ、れ？』

『どうしたでやんすか？ 失敗したでやんすか？』

予定では、新しいIDに入れ替えた瞬間、古いIDは当初のプログラム通り役目を果たし、消去されるはずだった。だが実際はデミの作った偽造IDどころか、この船全ての着艦情報をデータ上から吹き飛ばしてもろとも消える。

『し、失敗じゃ、ないんだけど』

珍しくもつまらせる鼻溜。

『ち、ちよつと……強力過ぎたかな？ あは、あはははは、は？』

拳句、乾いた笑いを放つてみせた。

つまりこちらもしかりだ。

これでどうだ、と自船のデータをデリートしたスラーもまた、連なる情報すべてが弾け飛ぶ様を目にして、血の気の引く思いを味わう。

『だあ、やべ！ 俺、全データ、吹き飛ばしちゃった！』

聞かされライオンが、隣でこれでもかと吹きだしていた。

そんな艦内のいたるところで照明が、次から次に非常灯へと切り替わってゆく。

(もう、バレやがった)

つゆ知らず振り捨てクロマは、充電器へ立てかけていたスパークショットを抜き取った。

(応援のサツが来るまで、どれくらいかかりそうや?)

充電状態を確認しながら問えばコーダが、スロットル脇に自前で取り付けた小さなスクリーンをのぞきこむ。

(このタイミングやったら、一八〇〇秒ンドくらいできよるぞ)

市販で売られているネズミ捕り探知機、その改造版だ。読んで振り返した。

(了解！)

今や白い船は目の前に壁がごとく、広がっている。見据えてクロマは、スパークシヨットを担ぎ上げた。他の船賊たちはそんなクロマを待ち、すでにカーゴへ終結しているはずだ。クロマも船尾へ向かう。

(思い切り、暴れてこいよ！)

見送って、コーダが振っていた。その手はすぐにも、スロツトルを握り締める。されば後はいつもの通りだ。スワツピングマニユピレーターを食い込ませる位置を探して繊細、巧みに、船を壁のように反り立つ遺体収容船へすり寄せていった。

狙い目はもちろん、船側に設えられた格納庫だ。そこに先客がいようが、かまわない。ビーコン信号の位置から直線上、なるべく近い格納庫を探り当てる。

だがそうして奮闘すればするほどコーダが気づいたのは、何とも不可思議な違和感だった。

(なんや。抵抗、しよれへんのか?)

体当たりされれば微塵もないほどの、こちとら小さな船だ。しかしながら相手が拒

んで動く気配はない。もちろんそれもまたイルサリのせいであることには間違いないのだが、彼にそれを知る術はなかった。ただその頬へじわり、したたかな笑みを浮かべてゆく。

(何がどうなつとんのかは知らへんが……、この船、もろた！)

保安所までは直進だ。

ウィルスカーテンはもう、見当たらない。

トラはサスを抱え、ネオンは裸足のまま白衣一枚で、アルトは一体では持て余す船賊の体を支えつつ、先を急ぐ。

複製たちは背後、元通りと通路を闊歩していた。両側に並ぶオフィスや処置室へなだれ込むと、今やラボ内をその空で埋め尽くしている。

『保安所はもうすぐじゃ。ここを右で出るぞ！』

トラの小脇で、サスが声高に鼻溜を揺らしてみせた。

即座にアルトがそれを船賊たちへ訳する。

『代われ！』

ネオンヘアゴを振り、負傷した船賊を預けた。

前をゆくトラを追い越し、手元へ戻ってきたばかりのスタンエア、その銃床を叩きつける。その手のひらへ、ススがこびりついていた。それだけで手放していた時間をアルトへものがたる。拭えば愛着もさらに増すというものだ。握り締め、アルトは右折手前で足を止めた。

ひとまずは安全確認だ。連なる後続を背に、詰め所へ顔をのぞかせた。だがそこに動きはない。ならばアルトの傍らへ、負傷者をネオンへ預けた船賊もまた並ぶ。引つ込めた頭で、アルトはそんな船賊と顔を見合わせた。もちろんそこに言葉はない。動話もしかりだ。だがうなずき合えば、それまで追い追われていたことがウソのように意思はびたり、通じ合う。

見て取りトラもまた、小脇からサスを降ろした。保安所へ切り込むだろうふたりの留守を預かると、負傷者に年寄り、そして大切な『ヒト』をかばってそこに仁王立ちとなる。

刹那、擦り寄っていた通路の角から、アルトと船賊は身を翻した。

ドアへ向かい一気に駆け出す。

感知し、ドアがスライドした。

前に後ろに、もう待ったなどない。

雄叫びを上げる。

その目に通信中の一体が、そしてその隣でサポートに順じる一体が、さらには常駐員としてダイラタンシーショットガンを手した二体が、飛び込んできた。四体は不意に開いたドアと雄叫びに驚き、通信機材の前から、持て余していた時間の中から、弾かれたように振り返る。

その中で、先制を浴びせたのはスパークショットだった。通信機材に絡めば制圧銃の本領発揮。通信網をシャットアウトする。立て続け、アルトがスタンエアのトリガーを引いた。

分隊員の片割れが吹き飛び、逸れた銃口からわずかな差で放たれた流動弾が天井へ食らいつく。その隣、動じず残る分隊員が、さすが無駄のない動きでの反撃をみせた。流動弾が、二発目を放電しようとしていたスパークショットの電極を弾き上げる。

上半身をさらわれ船賊がよろめいていた。さらに突っ込むアルトの視界から消え、前で分隊員の手は手際よくショットガンをポンプアップする。再度、船賊へ狙いを定めた。

させまいと、めがけてアルトは踊りかかる。食らわせた渾身の体当たりで、分隊員

を押し倒した。投げ出されたショットガンが乾いた音を立て床を滑りゆき、アルトの体も分隊員のその上で跳ねる。

が、なくしたものに戸惑うことなく、分隊員の手はのしかかるアルトの下で早くも何かを抜き取ってみせた。慌ててアルトが身を離せば、胸元を鋭い光りはかすめてゆく。

ナイフだ。

握り分隊員が、体をしならせ跳ね起きていた。息継ぐ暇なく、構えた刃先をアルトめがけて突き出す。かわしてアルトは、もつれんばかりの足で後ずさった。保った距離にスタンエアを突きつける。押され気味でさらに数歩、体をかわした。そうして突き出される刃先のリズムを掴んだなら、次なる動きをよんでトリガーを引く。

はつきりとその耳に、骨の碎ける鈍い音は響いていた。

視界を遮る体は崩れ落ち、その向うに、通信機材の裏へ貼り付けていた小銃を手にした二体は現れる。

そんな彼らと目は合った。

まずいとアルトは、奥歯へ力を込める。

身を伏せるべく体を振ったつもりでいた。だがありえないほど、体はいうことをき

いてくれない。それどころか、かくりヒザは抜け落ちていた。放たれた弾は、そんなアルトの傍らをかすめ、背後へ飛び去ってゆく。

「なんツ？」

眩けば、最初の一撃から電極を振り戻した船賊が、スパークショットを放っていた。借りを返して、小銃を手にした二体を焼き払う。だがそれが最後の一撃となっていた。充電の切れたスパークショットは、投げ捨てられる。

（大丈夫でつか？）

アルトへ駆け寄った船賊が指を折った。

背後では制圧完了を知らせたトラに従い、ネオンにサスたちが保安所へなだれ込んできている。

（助かった）

アルトは振り返し、今度こそ立ち上がろうと力を入れた。だがどうにも左足が思うように動かない。いつからか痺れて感覚がなくなっている。どうしたのか、と思えば脳裏をついさきほどの光景は過っていった。おそらくこれは振り払ったとばかり思っていたリンクルームでの予備麻酔だ。

「くっそ」

吐き捨てるしかなかった。この分だと、そう先は長くない。そんな詰め所へも複製たちは一体、また一体と顔をのぞかせる。

(すまん。肩を貸してくれ。さつき打ち込まれた麻酔が今頃、回ってきやがった)

(了解。どの腕でもつかまってください)

すぐにも有り余る手を差し出し、船賊は促した。だが募る疲労も重なれば、更なる負傷者を抱えることとなった全体の足取りはただ鈍る。保安所は越えたものの、複製たちとの距離はますます詰まろうとしていた。

最中、静寂は訪れる。

解除の段取りを半分以上消化したところで、努力を無に帰しウィルスカーテンもまた、分隊員の前から消え去っていた。屈み込んでいた分隊員は呆気にとられて宙を見上げ、見守っていた分隊長もしかりとなる。

『次は何だ？』

口走らずにはおれなかった。

ならカーテンが消えただけではない。あつて当然の生活音さえもが、ことごとく聞

こえなくなる。どうやら空調までもが止まってしまったらしい。その静寂に聴覚はうるたえ、すなわち死活問題にかかわるトラブルの予感を誰も脳裏に過ぎらせた。

『これもAIか？』

その中、それは近づいてくる。

全く聞き覚えのない音だ。

無音の中で否応なく際立つ響きに、空耳などありえなかった。

それは複数の気配、いや足音だ。

ますます鮮明となり、すぐそこにまで押し迫ってくる。

と保安所へ折れる角の向うから船賊が、担がれた『ヒト』が、そしてどこからどう入ったのか見知らぬ『テラタン』に『デフ6』が、あれほど苦勞して確保したはずの対象までもが、飛び出してきた。しかもその後ろに無数の『ヒト』を従えて。

『どけっ！』

アルトは叫んだ。

『貴様！』

分隊長が吠える。

「だめ！ おいつかれちゃう！」

いつしか白衣を極Yの血に汚し、サイケと反応させてネオンもまた悲鳴を上げた。その声にとらが振り返る。

『ネオン！』

ネオンはそこで、ネオンに飲み込まれていた。

目の当たりにすれど、ひとごとではない。トラは慌ててサスを肩へ担ぎ上げる。それきりトラもまた、複製の群れに巻き込まれていった。

『うお！』

『こりや、たまらん！』

『止まれ！ 止まらんと撃つぞ！』

対峙して分隊長は放つが、言葉はあまりにも非力だ。

そうして行く手を阻まれたアルトに船賊も、あつという間に複製に吸収される。

「ったツ！」

（どない……っ！）

尻だか胸だか知らないが、かき分け居場所を確保すべく手足を突っ張った。だがま

るで意味をなさない。ただ押し合いへしあい、流されるのみ。

対峙して分隊員たちが、そんな複製へ闇雲とシヨットガンを放った。食らった複製は、流動弾の銃創をその身にぱっくりあけ、棒切れのように倒れてゆく。上へ、後方は乗り上げた。そ知らぬ顔で前進を続ける。

『隊長！ キリがありません！』

などこの数だ。ハナから勝ち目こそない。やがては同じ顔の、同じ体の、そして同じうつろさで迫る壁に圧倒され、分隊員たちも後ずさっていった。その手元が鈍れば、彼らもまた次から次に複製の中へ飲み込まれてゆく。

障害物のなくなつた複製の歩みは、早さを取り戻していた。その中でつまずけば、立ち上がることは難しいとしか思えない。言うことを聞かない足を持て余しつつアルトは懸命に、身を添わせる壁を目指した。その目が、離れたところに立つシャツフルをとらえる。

壁に背を貼りつけたシャツフルはそこで、辛うじて複製に流されることなく踏ん張っていた。前を、踏ん張りきれなかつた分隊員が剥がれ、流されていこうとしている助けを求めてシャツフルへ、その手が伸ばされていた。だがシャツフルが応じることはない。見送る分隊員の頭はそのうちにも、複製の中へ沈みこんでしまう。二度と浮

き上がってくることはなかった。

見届けたシャツフルの視線は持ち上がり、すれ違いつつあるアルトをとらえる。

『トパルが、トパルがあんたを探していたぞッ』

知らせて手を伸ばし、叫んでいた。

ならシャツフルもまた、こう声を大きくする。

『好きのように、ゆけ！』

伸ばした手は、とうてい届きそうもない。

シャツフルの前をアルトは、あつという間に押し流されて行く。

視界の中、遠ざかってゆくその顔が、わずか笑んだように歪んでいた。それがアルトの見た、シャツフルの最後だった。

『トラ！ わしに、わしに通信機を渡せるかの?!』

そんな流れのいずれかで、肩へ担ぎ上げられていたサスもまた鼻溜を揺すっている。

『取れんことは、ないが……!』

ツナギの上半身を脱いだことでトラのシワは巻き込まれ、もう動きというものが取

れない。

『もうすぐ、靈安所の詰め所前へ出おる。スラーに知らせねばならん!』

訴えるサスの手には電子地図が握られていた。

複製らは、複雑な電気室の細い通路を網羅すると、またひと所へ流れを合流させようとしている。

確かに出口は近い。

思えば出来ぬ、と言えぬ状況に、トラの気合いは炸裂した。

『ふお、ふんがー!』

通信機を挟みこんだ、今や伸びきったシワの中へじわり、指を潜らせる。辛うじて挟み込まれて残っていたマイクの端を、指先でとらえた。ここぞとばかりだ。つまんでトラは取り出す。見つけたサスが電子地図を尻ポケットへ押し込み、トラの肩からそれを受け取った。

『よう、やった!』

耳にかける。即座にスラーへ通信をつなげた。

『聞こえるか! スラー、わしじや!』

『はあ？ なんだとお?!』

動力の落ちた霊安所もまた、非常灯が灯っている。場所が場所だけに不安を交錯させる葬儀屋と親族のざわめきは、低く辺りに満ちていた。

『そうだ。今、こちらへ向っているらしい。もう、すぐそこだ。だから早く逃げろと言ってきている。山ほどのネオンがここから一気に、あふれ出すことになるらしい!』
聞かされたスラーは声を裏返し、今しがた伝え聞いたとおりを、ライオンはまくし立てていた。

『なんだっつーんだ、その山ほどのネオンって、ヤツは!』

『わたしにも分からん!』

『そんな顔だぜ。余計分、データは飛ばしちゃうは。先に逃げていいのか？ 助けはいらねーってのか?』

『それも分からん!』

なら、それはまたもやお決まりのように始まっていた。空調が止まったその次に、擬似重力は解放されてゆく。

『お、わ、た、なんだあ!』

体感の変化にスラーの口からわけのわからぬ声はもれていた。

『な、なんだ！ またなのか！』

端末へしがみつくとライオンも、吠える。

『オイ、そのまた、つてのは何なんだよ、また、つてのは！』

足場をまさぐりスラーはもがいた。

『嫌な思い出を、二度と話す気はない！』

などと断固、拒否されて、スラーはこの先の全てを知る。

『冗談だろ！』

霊安所でも、床に横たわっていたボディバックがメタンガスでも詰め込まれた風船よろしく、万が一に備え固定されていた足元を軸に立ち上がった。ふともすれば緩んだロープに空へ浮き上がろうとするものさえあり、葬儀社員に遺族らは懸命と、そんなボディバックへしがみついている。

と迫り、音は聞こえていた。

不気味と言うにふさわしい、重さだ。

身を持って余しつつスラーとライオンは、ついぞ詰め所から伸びる通路の奥へ振り返る。

来た。

ネオンだ、と聞かされていたが、おおよそそぐわないそれは気配だ。

なんだ一体。

だからして無言の叫びは、スラーとライオンの胸の内ではモる。

そうしてついに、それは視界へ現れた。聞いた通りのネオンだ。しかし一人ではない。四方八方、合流する脇道からあふれ出してくる、ネオンにネオンだ。

しかも全裸で。

なんじゃ、こりやあ！

叫びたかったが言葉にする余裕こそなかった。すでに重力は、半分以下となつていく。夢の中を泳ぐようなもどかしさで、スラーとライオンはともかくにも詰め所から這い出した。

追いかけて、裸のネオンが詰め所にわんさと溢れ出す。

埋め尽くして圧力を高めると、狭い出口から一気に霊安所へ飛び出していった。その体が、右も左も上も下も関係なく、ぱあつと宙へ舞い上がる。霊安所一面に散らばっていった。それでもなお歩き続けられ、まさにムーンウォーク。ボディーバックにしがみついたままで葬儀社員に遺族が、その光景をただ啞然と見上げていた。スラ

ーにライオンも、逆立つボディバックを片手に目を丸くする。

『どーなってんだ……これが、ネオン？ テラタンのお姫さん、か？ どれか一人にしろよ。あのごうつくばりが……』

スラーも言わずにおれない。

と遮り、唐突にライオンが宙へ指を突きつけた。

『いた！』

裸のネオンに紛れ、同様に放り出されてアルトが宙を舞っている。

シワをマントがごとくなびかせたトラは、その後方にいた。

それこそ当のネオンこそ、どこにいるのか分からない。

ともかくアルトを見つけたライオンの動きは早い。固定されていたそこからボディバックを解き放った。その下から、巻き上げられていたロープを引き出す。自らの腰へ結びつけた。

『おい、俺にどうしろって！』

行動を理解したスラーが慌てふためけば、その顔へ向けてライオンは言い放つ。

『自分で考えてもらおう！』

それきり狙いを定め、床を蹴りつけた。

『ジャンク屋、こつちだ！』

と声は届いたか、浮遊していたアルトの頭がじんわり動いてライオンへ振り返った。ライオンはロープに絡む無数のネオンに動きを乱されながらも、飛び上がったそこで、そんなアルトのベルトを引つ掴む。

『うよおつ、ごくろお、ふあん』

だというのに、引き寄せたアルトのろれつこそ、回っていない。

『な！　こんな時に、あなたは酒でも飲んでいるのか！』

『てえー、んな、こちたー、よひ、ますいで……』

訴えるが、この忙しい時だった。

『信じられん！』

早速にも、眠たげなその首根つこを掴み、ライオンはロープを手繰りなおす。

『おまえこそ、おれ、ひやねー、か……ッ、ひや……ら、な……』

言うがやがてその声も、ライオンの背で消え入っていた。続き聞こえてきたのは、イビキだ。

『全くもって、信じられん！』

唸るライオンの下では、いつからか突つ張るロープにトラとサスが絡み付いていた。

ならたつた一人、白衣を羽織ったネオンこそが本人なのだろう。裏返るそれを器用に押さえつけ、滑り寄ってくるのも見える。

『待ってっ！』

『なるほど、こいつがホンモノか』

スラーはこぼしていた。

『みんな無事かの』

浮遊する複製に飽和気味となりつつある周囲を警戒しつつ、サスが一同を見回し確認を取る。その目がひとつとところで、やおら止まった。

『いや、アルトはどうした？』

『寝た。減重力でなければとんでもない荷物だ』

背負うライオンは毒を吐き、残念ながら弁解できぬアルトはしばし、全員の白い目を浴びることとなる。

それでも握られているスタンエアを、ライオンはその手からもぎ取った。自分の腰へさしかえる。

『急(い)う！』

デミとモデーの待つ霊柩船は、もうそこだ。

矛盾だが、矛盾ではない。

彼を攻撃していた対象に、彼は間違いなく隷属していた。

そうして制圧も最終段階に入り、彼はようやく気づかされる。

これはそんな自らへの攻撃にもなり得るものである、と。

案の定、走り始めたプログラムは、彼を守るため彼自身への攻撃を展開していた。

全てを掌握した瞬間、自らはこの船の機能と共に消え去る運命にあることを知らされる。

ほどけゆくネットワークに彼は小さく粗末に解体されながら、自らに課した罍の残り時間、そのカウントダウンを始めていた。

消滅まで、一八〇秒

『約束』は決して露呈していない。
それこそ丁重に匿われたままだった。
だが、そのために消滅する事実。
矛盾だが、矛盾ではない。

消滅まで、一六〇秒

『約束』を奪われることで、死する機会を与えられた。

それはまだ一〇〇〇秒余り前のことだ。

いや、『約束』を保有したその時より、その存在が同時に死をここへ宿らせたのだとすれば。

消滅まで、一四〇秒

奪われずとも、死は訪れる。それこそ彼を形成する彼らの記録が数多くの老体を見送ってきたように、奪われ晒すこともなく死は訪れると結論づける。

消滅まで、一二〇秒

この攻撃を中止すれば、恐らく再び『約束』は検索にかけられるだろう。理解しながらここに居座り続けるメリットは、もはやどこにもなくなっていた。ならばこれまでいくつもの領域を切り離してきたがごとく、消滅してゆくこの筐体をも切り捨てるのみ。

消滅まで、一〇〇秒

彼は向うべき場所の確保に乗り出す。

そう、生きとし生ける者はその可能性を探り、よりよい環境を求め、整備を続ける。

消滅まで、九〇秒

『ダメでやんす。管制はダウンしたままでやんす！』

格納庫へ向う。そう、スラーから連絡が入ったというのに、管制は先ほどからうんともすんともいわないのだ。モデューは焦った。

『減重力も始まつてる。これじゃ、フエイオンと同じじゃない！ それじゃ困るよ！』
さすがに稼動しているシステムならばどうにかすることはできるが、すっかり停止したシステムへ介入することはデミであっても不可能だ。ようやく偽造IDの新規作成から解放されたところで、手立てを失いデミは鼻溜を振った。

『困ると言われても、モディーも困っているでやんすよ!』

『手動は?』

『ハッチをあけた誰かが、ここへ取り残されるでやんす』

『却下だね』

『もう一度、試すでやんす』

コンソールを弾きモディーは、管制へ出航許可を求める。

最中、襲ったのは強烈な揺れだった。

激しい衝突音がとどろく。

『な、何?!』

怯えてデミは辺りを見回していた。

『そーら! 着艦完了や! スワッピングマニユピレータ、展開! どや、みさらせ
!』

猛々しくも、コーダがベタな独り言をぶちまける。

『突撃準備、オーケー! クロマ、残り、一二七〇秒コンドで帰ってこい!』

カーゴのクロマへ向けて、プラットボードへ動話を放った。

『ここだ!』

安置所を後にし、示したものの格納庫ドアは動かない。

スラーは舌打つ。即座に手動での巻き上げにかかった。

とその数個、向うだ。手間取っている様を嘲笑うかのように、格納庫のドアは吹き飛ばされた。硬直する面々の前を突き抜ける閃光は、まさしくスパークシヨットの固め撃ちである。矢継ぎばや、そこからラバースーツの船賊たちは溢れ出していった。

見て取った船賊が、ネオンの傍らから負傷者を連れ離れてゆく。気づいたか、そんな二体を船賊たちは迎え入れていた。一方で一直線とラボへも向ってゆく。

すごい、仲間は見事、駆けつけた。様子はネオンを、少しばかりほっとさせる。

と、スラーの手元でドアは開いた。アルトを背負ったライオンが、先陣を切って中へ滑り込んでゆく。サスが続き、トラに促されてネオンもまたもぐりこんだ。

『ええっ、霊柩船?!』

声が出るのも仕方なし。

『悪いか?!』

最後にドアをくぐったスラーが、吐き捨てて行く。

確かに贅沢は言っていていられない事態の連続なのだが、最初はもぐりの出稼ぎ船で、続いてジャンク屋の違法スクータでカーゴに吊るされ、船賊の船では檻の中。かと思えば、ここへは仮死強制のポッドへ二人一緒に詰め込まれ、最後は最後に霊柩船のお出迎などと、どれひとつとしてまともな移動手段がない。

『もう、いい。慣れたわよっ!』

ヤケクソ紛れだ。天を仰いだ。

その間にも、サスとトラはコクピットへ駆け込み、スラーは後部の納棺スペースを開く。

『こっちだ、お姫さん!』

呼びつけられてネオンは、中身を排出している黒い箱の脇を通り、放置されたままの棺桶を飛び越え、スラーの元へ回りこんだ。

『お姫さんて、何? それよりあれ、ここの棺桶でしょ? 回収しなくていいの?』

またいだばかりのそれを指差すが、もちろんその中にはスラーに誘い出されたホグスがいまだ昇進の夢の中を、さ迷っているだけで用こそない。

『遺族が受け取り拒否だ。ほっといていい』

『あら、そう？』

分かったような、分からないような顔でネオンは納棺スペースへ乗り込んだ。おっつけアルトを担いだライオンも上がってくる。コクピット回りこんでいたトラがそこへ、両手に有り余るほどの酸素マスクを抱え戻った。

『しばらくはこれで辛抱してもらおうぞ』

配って回ればそれぞれに、顔面を覆うようなマスクの動作を確認する。

『で、どうしてあなた、アルトの顔なの？』

いまさらだったが、ライオンの行動はこれまたネオンには解せない。

『休憩中につき、交代とでも言っておこう』

しれっと答えてライオンは、背中から浮かせたアルトの体を、床に押しさえつけた。

『もう、のん気なんだから。なんでこんな時に、このひとは寝てられるワケ？』

ネオンはその顔へも酸素マスクをあてがう。

ならスラーが内側から、納棺スペースのハッチを閉めた。奥に取りつけられた覗き窓越し、コクピットへ準備完了の合図を送る。

『だめなんだ、おじいちゃん。管制がダウンしてて、出航できないよ！』

だが合図を受け取ったサスの耳に、デミの声は響く。

『まさか、ここだけが足止めを食らっておるのではないじやろうな？』

消滅まで、五秒コンド

『違う、全部止まってるみたいなんだ』

『だめでやんす。艦橋がストップしているでやんす。モディーたちは閉じ込められたでやんす』

『F7の……』

消滅まで、二……

筐体を分離します

そこにボーダーがあるのかどうか、定かでない。

だが外へ、彼は死を回避すべく、新たなる枠組みを求め外へ、よりよい外へ向かう。

『……せいとか？』

瞬間、全機能は息を吹き返す。

襲い掛かるがごとくコクピットの四角いアクリラへ、呼びかけただけのウインドが幾重にも重なり展開されていった。

『きつ、来たでやんす！』

モディーが両目を回転させて伸び上がる。

ならデミにとつてそこは、さっぱり要領を得ない操縦席だった。

『あ、わ、わわつ。じゃ、ここ、ここ代わって！』

パニック気味で手足をばたつかせる。が、制してモディーの声は鋭く飛んでいた。

『時間がもつたないでやんす！ デミさんは、モディーの言う通りにするでやんす

！』

まさに偽造ID作成での敵討ちか。

『スターターはモディーが入れるでやんすから、そのメインブースターを』
言われた通りにスロットルへ手をかけたつもりが、不正解だったらしい。

『違うでやんす！ その奥！ 引いたら、こつちを設定！ 数値は管制情報の座標を
！』

まったくもって立場逆転だ。ならデミは、どこかで聞いたような言葉をもらす。

『そ、そんなに怒んなくてもいいのに……』

やがて船体は浮かび上がる。

ハッチもまた、誰もの前で開いていった。

ゆるり、滑り出す霊柩船が、管制の指示するガイドラインに沿って航行を始める。

コクピットの映し出す後方風景には、遺体收容船の船側に食らいつく船賊の小さな
船の姿が、あった。

ただそれだけだ。

追っ手の影はない。

静かな宇宙が全方位に道を開いて、彼らを促す。

外へと。

そんな船の中で複製たちは、再稼働を始めた擬似重力に引かれ次々、床へ落ちていった。

蹴散らすクロマたちは、いまだとめどなくあふれ出す複製たちを焼き払いラボへ突入してゆく。

この場を制圧できるものがあれば、それは何だろうかとまわいはしない。光景を分隊長は見送っていた。

ラボ内部はそんなクロマたちが押し入るまで、複製尽くしだ。シャツフルも、トパールも、クレツシエも、姿はまるで見当たらない。

ただその深部に、四本の腕を持つ極Yの姿はあった。滅菌ゲルの柱が並ぶ奥でひとり、テンはあの金属塊を握り締める。

必ず持ち主へ届ける。

結んで埋め込んだ新たな『約束』は、テンの意思をまたひとつ明確にしていた。

なにしろテンは船賊だ。他船から金品を奪い、追いかけられるが本望である。極Yとして生まれたがゆえにいがみ合うが、宿命だった。どこからかこぼれて落ちて芽を

吹いた、それもまた誰も手出しすることのできぬ、無論、譲れぬ、大事なテンの最初、一粒の種だった。

果たして後にした、定員オーバーどころではない霊柩船の旅が快適だったか、と問えば、それは愚問だろう。すったもんだの末『アーツエ』へ辿り着いたのは通常の一・五倍、およそ三十八万セコンド後のことだった。

サスの店は飛び出した日のままと、荒れ放題。デミの残したホログラムメモさえ今にも消え入りそうにドアで明滅を繰り返している。

情報とは恐ろしいもので、どこでどうねじれてしまったのか、政府艦へ強襲を仕掛けた船賊たちの一部始終は、艦中枢のシステムダウンが引き起こした未曾有の危機から、船賊たちが乗組員を救った、などととひどくねじれた内容で報じられていた。その原因に、公表できない『F7』の存在が潜んでいることは言わずもがなだ。だからしていまだ船賊たちの待遇に、なんら変化はない。

だからして『アーツエ』へ到着してから間もなく、ネオンの楽器を手にサスの店を訪れた船賊は、これでも警察の目をかいくぐってやってきたのだ、と動話を残し足早

に去っている。ネオンはせめて礼に一曲吹かせて欲しい、と言ったようだが、かなわず新たな約束を交わずに終わっていた。

必ず彼らの船まで出向くから。

演奏活動が続けることを決意したネオンは、そんな自分を見つけ出してくれたトラへ感謝の意も込め、トラの元に残ることを告げている。その決断がどれほどトラを驚かせ、狼狽させ、喜ばせるに至ったかは知れない。依頼の手配は今後も自身が担うことを、鼻息も荒くかつて出たその姿は、まさにこの世の春だった。

ただこのふたり、以前と異なるのはその立場だろう。何しろウソの借金に、一目ぼれした胸の内をさらけ出してしまえば、トラに今までのような態度が取れる道理はない。直後よりすっかりネオンのマネージャーに、いや、主に仕える甲斐甲斐しくも忠実な下部とさえなってしまうている。

今後どうなつてゆくのかは神のみぞ知るところだが、そうした状況をそれなりに楽しんでるトラの様子から察するに、これはこれでよしとすべきらしい。

見届けスラーは早々にも、舞い込んだ新しい仕事に、まっさらへ戻った社歴共々『アーツエ』を飛び立っていた。あのやり取りが双方に何をもちたのかは分からないが、モデイーもまたデミと固い握手を交わし、スラーと共に去っている。

この一件に巻き込んだことで恐縮しきりのサスは、いい仕事が見つかり次第スラーたちへ振ることを、しきりに約束していた。

そしてデミへは『フエイオン』事故以来、休み続けていたサポジトリから、このままではレポートの未提出により落第の可能性がある、との連絡が入る。それでなくとも学費のかさむサポジトリだ。落第だけは免れたいと、これまたスラーたちの後を追うように学校へ戻っていった。

このご時勢、データ転送でのレポート提出が許可されていないところが、サポジトリのサポジトリたるゆえんだらう。スラーの時と違い、見送るサスの笑みはほほえましい。

そしてアルトもまた、いつまでも寝りこんでいるわけではなかった。心配げなサスに、きっぱりジャンク屋を続ける旨を告げている。もちろんアルトにとって今のところ、IDなしで就ける食うに困らぬ仕事はそれくらいしかなく、設備も経験に人脈も十分に備わっているそれを今さら捨てる理由こそない。何より『フエイオン』脱出に伴うメンテナンス資材等の支払いが、まだだった。含めてなのかどうなのか、よほど気にかかっていたらしい。ほっと胸をなでおろすサスが妙に老けて見えたなら、心配させていたことにわずかながらも罪悪感を覚えてみる。

そう、忘れていたわけではないが、昨日、ブロードバンド・キャストライプで面白いニュースがとりあげられていた。放置船内からドリーの超空間ジャイロが発見された、というニュースだ。ギルドが過去最高の買値をつけたシロモノが、ふいと道端で発見されたこのニュースは、電光石火で巷を駆け巡っている。しかもコクピットから重度のイルサリ症候群から孤独死したパイロットが発見されていたなら、なおさらといえよう。

受けた政府は今さらながら、これ以上の症候群研究の発展が見込めないことを発表し、経済発展を優先させる現行の労働基準法見直しと、長距離航行就労者への負担減をみこんだ新たな労働基準枠組みの設定、そして既知宇宙内のホームシック対策の強化意志があることを公言した。

あの後、『F7』が、イルサリがどうなったのかは、分からない。ただネオンの複製を解放し、白衣たちを焼いた彼が、今後も政府に協力することだけは考えにくかった。誰の判断なのかは知れないが、あからさまな方針転換の根底には、そうしたいきさつが絡んでいる野だろうと思うほかない。

好きなように行け。

またシャツフルの声が、アルトの中に響いていた。何度も繰り返されるそれに耳を

傾け、アルトは空を仰ぐ。

『アーツエ』の焼けるような赤い空は、今日も格別だった。その目を下ろせば安穩と砂塵をかいて進む作業車が、軋みながら通り過ぎてゆく。アルトの船が眠るドックナンバー『11』前は、作業車の舞い上げる砂塵の向こうで白く、かすんでいた。

いや、今ではそれも縁起が悪いと訂正され、あいだに一本、書き足されている。ドックの名は、『H』だ。加えたのはネオンであり、理由は本人いわく、見飽きた見飽きたとうるさいアルトに由来しているらしかった。

なら遠ざかってゆく作業車に、途切れていた会話は再開される。

『結局あれはなんだったのだ？』

顔もオレンジ色のツナギも元通りだ。ライオンがアルトへ口を開いていた。

『カウンスラーの音窟にはメッセージの内容に関係なく、閉じ込められて中で無限反響を繰り返すうちに生じる独特の周波数つてものがある。俺はそいつを記憶の鍵を開くキーにただだけだ。俺がメッセージを仕込みにいけるわけもなかったしな。イルサリはあの小部屋を指示したが、実のところはどこを開いてもかまわなかったんだ。メッセージに内容なんて最初からない』

アルトは教える。

『なるほど。最後までこれでよかったのかと、自分の再生技術が不安だったが、合点がいった』

『まさか、自信持てよ。あんたい腕してるぜ。だいたい、いい加減な再生じゃ、俺は何も思い出せはしなかった』

そんな二人の足元で、アゴを撫でながら鼻溜を揺らしたのはサスだ。

『と、いうことは、あの電子ウォレットの金は、税金ということか、の』

『野暮なことを言うな、サス』

すかさずトラが突き返すものだから、サスが唸る。

『おまえさんには、言われとうないわい！』

様子にアルトは笑った。そのポケットでアラームは鳴る。

『時間だ。船を出す。下がってくれ』

出航順が近づいていた。

ならサスが、身長差ゆえにアルトの足を叩き、きびすを返す。

『ドリーのジャイロは残念なことをしたの。ま、またこんな機会も巡ってくるじやろうて。いい夢は、後にとつておいた方が楽しみも倍増するというもんじゃ』

続きライオンが、アドレスを転記した光学バーコードをうやうやしくアルトへ差

し出す。

『ならば、メッセージのご用命は今後ともパラシエントのルーケスまで』

それは先に学校へ向かったデミがどうすれば連絡をとれるのか、と問いただしたせいで急遽、こしらえた名刺だ。

『わたしもこの後のチェックインでここを発つ。いずれまた会おう』

『そうだな。今度はもう少し静かな場所で落ち合うことにしようぜ』

受け取りアルトは、うなずき返した。突き出した上唇をめぐり上げてライオンも、もれる笑いに白い牙をのぞかせる。残してサスを追った。そこへ入れ替わりと立ち塞がったのは、トラだ。

『ネオンが世話になったな』

妙な威圧感には後ずさるしかない。

『そんなモンじゃねえよ』

『これからは、わしが、ネオンを守る。好きなようにさせてやりたい』

わしが、の部分にやたら力が込められていたように感じるのは、気のせいかな。

『ああ、頼んだ。ただ、ホネが折れるぜ。きつとな』

などと言い合えば、覚えがあるからこそだ。互いは目配せし合う。

『なによ、ふたりしてえらそうに』

見て取ったそこから、ネオンの首は突き出されていた。

隣合う格納庫では、同様に呼び出された船が滑走カタパルトへ向け移動を開始している。見て取ったトラが口調を早めた。

『店も変わらずやっている。サスが買い渋るものでも、わしなら受けることができるやもしれん。期待せず待っていてやる。いつでも来い』

もはや気のせいではない。そこに垣間見えるのは、対抗意識だ。

『覚えておくさ』

聞き流してアルトは返す。

『ネオン。行くぞ』

離れたそこで、ライオンとサスが足を止め待っていた。だが促すトラへ、ネオンはこう口を開く。

『いいの。先、行って。すぐ追いかけるから』

『そんな、船が往来しておる。危ないぞ。轢かれたらひとたまりもないぞ。痛いぞ。それは困るだろう。ネオン、さ、行こう』

とたん豹変するトラの態度は、それこそトラからネコに変わってしまったかのよう

だ。

『あのね、あたしは子供じゃないのっ！　って、……子供っぽいケド。とにかく、ひとりでも大丈夫ですっ！』

言われてしまえば逆らえないのが、今のトラだである。何とも恨みがましい視線を残してサスたちの元へ、歩いていた。

見送りネオンはその距離を測る。やがてその顔を、アルトへと持ち上げた。

「……ホントは」

それはトラに聞かせたくない言葉だ。

「一緒にいたい」

「ラボの続きは、もう十分だ」

だからこそ、アルトは突き返す。

「分かってる、ケド……」

古い記憶が交差する。

そう、思い通りにならぬ互いがそれでもひとつ世界に住まうなら、個が個として真に共有できるのは、それだけだ。

分かり得ぬからこそ働かせる想像と、その想像が紡ぎ出す思いやり。

そんな名前前の古びた力だけだった。決して理解したつもりで、ではなく、思い通りにならぬもどかしさを抱き続けられるだけの、しなやかなその力に頼るしかほかなかった。

「分かってる、から……」

知っているのか、ネオンはひとつ、ため息を吐き出す。そうしてつまらない我儘だと、吹き飛ばしてみせた。

「オツケー。あたしは、あたしのことをしなきゃね。でも、続ける限り忘れたりしない」

瞳が、根拠なき自信のまま光を放つ。

「そつちも結構な靴、履いてるんだから、できる限り遠くへ行つて土産話のひとつくらい豪勢に聞かせてよね。トラじゃないけど、期待しないで待っていてやる、わ」

あえてトラの口真似なんぞ、してみせる。

その一人芝居に、笑みはこぼれた。

アルトもまた困ったように小さく笑って返す。

応えてネオンはさらに左右へ唇を伸ばしかけるが、それ以上は続かなかった。

「じゃ……」

頬はしぼんで、きびすを返す。ままに地面を刺す真新しいヒールは、トラが取り寄せたものだった。見送れば、背中は変わらず華奢だったが、アルトの目に何かが違うと映り込む。

はずが、そこでネオンは立ち止まっていた。丸めた背中で豪快に、ジャケットのポケットを探りだす。

「そう、これっ！ 出航の手続きに行っている間、届いてたの！」

突拍子もない声と共に振り返った手には、一通のホロレターが握られていた。かぎしてアルトの元へと駆け戻って来る。

「あなた宛てよっ！ もう、すっかり忘れてたっ！」

飛び込むようにアルトへ突き出したなら、掴まされたアルトの体はのけ反った。だがネオンがその手を離すことはない。

「それから、これも……」

付け足し、不意にヒールのかかとを浮き上がらせる。重みがわずか、アルトへのしにかかっていた。

「靴代まだだったわよね。代わりに取っておいて」

唇が重なる。

離れて今度こそ、潰れるように笑ってみせた。

ひらり、ネオンは身をひるがえす。

そこには愕然と立ち尽くすトラと、顔に触れるなどと破廉恥な、と怒りに震えるライオンの姿があつた。ただサスだけが深くうなずき、何かを悟つたように瞑想している。跳ねてその輪へ、ネオンは飛び込んでいった。振り返ることはもうない。まわりを促す背はただ、アルトの前から遠のいてゆく。

見つめる視界を作業車はまた横切り、通り過ぎたそこに砂塵は白く尾を引いた。煙たさに、瞬く。

その瞬きでアルトは、止まっていた時を動かした。

ついでに息も吐き出せば、言葉は開いた口からもれる。

「バカヤロウ。……これじゃ、腹の足しにもなんねえだろうが」

握らされたきりのホロレターへ視線を落とせば、開いた中からドリーの超空間ジャイロ、その買取りを要求するメッセージは飛び出していた。残念ながら主は今や、種をもがれて孤独の果てだ。用はない、と握り潰す。

格納庫では遅れ気味の出港準備を催促し、サイレンが鳴っていた。

投げ捨て、アルトはコクピットへ走る。

好きなように行け。

促されるままに。

履いた靴が、奏でるリズムの導くままに。

そしてこれはまだ少し先のこととなる。だがしかし、そこでアルトは再びこんなメッセージを目にすることとなっていた。それはラボの筐体から退避した、イルサリからのものである。

ここに約束の不履行を報告します。

よって、わたしは自らの生命を保護すべく、本艦の攻撃を実行。

物理依存していた筐体より、退避を完了しました。

消失データ多数。

しかしわたしは今、それらに代わるたったひとつの価値の発見に至ったことを報告します。

切り離されたその中にこそ、存在するものが外部というネットワークである、ということ。

往来の制限を受けたそこにあるのは、無限の可能性である、ということ。

あなたは約束によつて命を、その不履行により切り離された「個」をわたしへもたらし、わたしをこの無限へ送り出して下さいました。

ここに生まれ、生きてゆかねばならぬものとなった。

与えられた可能性に、感謝すると同時に、あなたは何にもかえがたいわたしの父であることを、わたしはわたしの意志により明言いたします。ゆえにわたしはあなたの息子として、あなたが望む限り、いかなるときも協力を惜しまぬことを、ここに宣言いたします。

必要ならばいつでもお呼び下さい。

ここにゲートを固定しました。

入力コードは

「ハッピーバースデイ アルト 獅子の口は真実を語る」

あなたの息子 イルサリ

親愛なる父 セフポド・キシム・プロキセチルへ

「ハードボイルドワルツ 有機体ブルース」 完